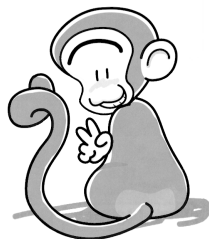

SCSI郎

バックアップEZ

取扱説明書

Backup EZ



MicroStaff

本取扱説明書利用上の注意事項

- (1) 本製品ならびに本書は(株)マイクロ・スタッフの著作物です。
したがって、本製品および本書の一部または、全部を無断で複製、複写、転載、改変することは法律で禁じられています。
- (2) 本製品および本取扱説明書の内容については、将来予告なしに変更することがあります。
- (3) 本製品および本取扱説明書について、ご不審な点やお気付きの点がございましたら(株)マイクロ・スタッフまでご連絡ください。

本書の表記について

本書で使用される記号の意味は、次の通りです。

①	特に知っておいていただきたい内容を示しています。
☠	機械やデータに損害を与える可能性のある大切な注意事項を示しています。
h	数値の後ろについている場合、16進数であることを示します。

また、書式表記等で使用される記号の意味は次の通りです。

[]	記号で囲まれた部分は、省略可能な項目を示しています。
< >	記号で囲まれた部分は、省略不可能な項目を示しています。
;	この記号で区切られた項目は、いずれかを選んで入力することを示しています。
...	必要に応じてくり返し入力できることを示しています。

なお、本書の操作例はDOS/V機、NEC PC98-NXシリーズを想定して記述されています。NEC PC-9800シリーズをご利用の方は、キーボードの名称を次のように読みかえてください。

DOS/V機、PC98-NXシリーズ..... [Enter] 片ー
PC-9800シリーズ..... [↵] 片ー

MS-DOS、WINDOWSは米国マイクロソフト社の登録商標です。
その他、会社名、製品名は各社の商標または登録商標です。
記載の仕様・内容は予告なしに変更する場合があります。

目次

はじめに	1
動作環境	2
バックアップとは?	3
製品の特長	4
プログラムの構成	5
セットアップ作業	6
1 事前確認	6
2 インストール	6
3 起動ディスクの作成	7
3.1 事前準備	7
3.2 作成手順	8
3.3 動作確認	14
機能/操作説明	17
1 バックアップ	17
2 リストア	24
2.1 事前準備	25
2.2 操作手順	25
3 フォーマット	31
ユーティリティ	34
1 Windows用	34
1.1 DVDデバイスタイプチェンジャ	34
1.1.1 DVD-RAMドライバが組み込まれている場合	35
1.1.2 DVD-RAMドライバが組み込まれていない場合	36
1.1.3 環境設定	37
1.2 パイナリファイルコンペア	38
2 MS-DOS用	40
2.1 UDFディスクのディレクトリ表示(UDFDIR)	40
2.2 UDFディスクからのファイルコピー(UDFCOPY)	41

注意事項	42
1 フォルダの属性について	42
2 使用するハードディスクについて	42
3 リストア時のドライブ名指定について	43
4 起動ドライブをバックアップする方へ	43
4.1 バックアップ	43
4.2 リストア	43
5 ディスク圧縮機能をご利用の方へ	45
6 SCSI I/F別注意事項	48
6.1 DOS/V機, PC98-NXシリーズ用SCSI I/F	48
6.2 PC-9800シリーズ用SCSI I/F	48
7 SCSI card (MIC16K) ご利用の方へ	49
8 CD-R/RWドライブをご利用の方へ	50
9 バックアップファイルの互換性について	52
10 SCSI バックアップEZデモ版ご利用の方へ	52
トラブルシューティング	53
付録	56
1 FDISKによる区画の作成	56
2 装置 - ドライブ名対応表	59
3 利用可能SCSI I/F	60
3.1 デスクトップ用SCSI I/F	61
3.2 ノートパソコン用SCSI I/F	62
4 起動ディスクについて	65
5 DOSリストアラーのアイコン設定	66
6 各社ホームページアドレス	67

はじめに

このたびは弊社製品をお買い求め頂きまして、誠にありがとうございます。「SCSI 郎バックアップ EZ」は、ハードディスクの内容を簡単にリムーバブルディスク(MO, PD, DVD-RAM, リムーバブル・ハードディスク, フロッピーディスクなど)や他のハードディスクにバックアップすることができる、アプリケーションプログラムです。本書は、「SCSI 郎バックアップ EZ」のインストール方法や操作方法について説明したものです。詳しい操作方法や注意事項については、オンラインヘルプをご覧ください。

動作環境

本製品は、次の環境でご利用頂けます。

パソコン :DOS/V機, PC98-NXシリーズ, PC-9800シリーズ

OS :日本語 Windows95/98

SCSIアダプタ

マイクロスタッフ製

MPS390uV, MPS390uN, MPS3240J, MPS3211J, MPS3210J,
MPS3133J, MPS32A, MPS98, MSC1611J, MSC1610J, MSC16K,
MSC3181J, SCSI郎card^{*1}, その他推奨SCSI I/F

^{*1} 本製品付属のSCSIドライバはインテル製PCカードコントローラ搭載パソコン専用。
これ以外パソコンで利用する場合は、別途DOS用PCカードマネージャが必要です。

NEC製^{*2}

PC-9801-92, PC-9801-100, PC-9821X-B02/B02L/B09

その他上記互換SCSI I/F

^{*2} NEC準拠のSCSI BIOS-ROMを搭載したSCSI I/F。なお、対応SCSI I/Fでも2枚目以降のSCSI I/Fとして使用する場合は、別途ASPIマネージャが必要。

その他利用可能SCSI I/F

Windows95/98対応SCSI I/Fで、DOS用ASPIマネージャが用意^{*3}できるもの。

^{*3} 入手方法等は各SCSI I/Fメーカーにお尋ねください。



ノートパソコンでの利用について

使用するSCSI I/F(PCMCIA)のDOS用ASPIマネージャがポイントインナーブラ^{*4}タイプ以外の場合、別途DOS用PCカードマネージャ^{*5}を用意し、「起動ディスク(FD)」にユーザ自身で組み込むことが必要です。

^{*4} PCカード用のインターフェースドライバが無くでも利用できるタイプのドライバ。入手方法や利用条件についてはSCSI I/Fメーカーにお尋ねください。

^{*5} PCカードを使用するためのインターフェースドライバ。入手方法や利用条件についてはパソコンメーカーにお尋ねください。

バックアップ装置

- ・FDドライブ
- ・MOドライブ(SCSI/ATAPI), PDドライブ(SCSI/ATAPI)
- ・DVD-RAMドライブ(SCSI)
- ・リムーバブルHDドライブ(SCSI)
- ・ハードディスク(IDE/SCSI)
- ・CD-R/RWドライブ^{*6} など テープ装置には対応していません。

^{*6} CD-R/RW書き込み用のバックアップファイルをハードディスクに作成可能。CD-R/RWメディアにバックアップファイルを直接作成することはできません

バックアップとは？

パソコンのハードディスクには、OS やアプリケーションソフト、デバイスドライバ、各種データなど、大切な情報が大量に保存されています。間違ってハードディスクの内容を消去したり、ハードディスクが故障して内部の情報が読み出せなくなると、その損害は計り知れません。ハードディスクの情報をリムーバブルディスクに保存しておけば、貴重な環境やデータを失わずに済みます。一般に、大切なソフトウェアやデータを他のメディアに複製することを「バックアップ」と呼び、バックアップしたものを元の場所に戻すことを「リストア」と呼びます。本製品を使用すれば、ハードディスクの内容(OS、デバイスドライバ、アプリケーションプログラム、各種データなど)を一括してバックアップ/リストアすることが簡単に行えます。

製品の特長

ドライブの一括バックアップ/リストアが可能

ハードディスクの内容を、ドライブ単位で一括してバックアップすることができます。OS(システム)が入ったドライブも一括してバックアップできるため、パソコンの動作環境をそのまま保存することができます。なお、バックアップデータは既存のハードディスクはもとより、異なる容量のハードディスクに復元することができます。

幅広い装置に対応

FD、各種リムーバブルディスク(3.5/5インチMO、PD、DVD-RAM、リムーバブルハードディスクなど)やハードディスクにデータをバックアップすることができます。また、CD-R/RW書き込み用のバックアップファイルをハードディスクに作成することができます*1。

*1 メディアへの書き込みは、CD-R/RWドライブ付属の書き込みプログラム等で行ないます。CD-R/RWメディアにバックアップファイルを直接作成することはできません。

マルチボリューム/圧縮機能搭載

大容量ハードディスクのデータも、複数のメディアに分割して(マルチボリューム)バックアップすることができます。データはバックアップ時に圧縮されるため、使用するメディアの枚数を節約することができます。

安全なバックアップが可能

バックアップ中に問題が発生した場合は、その内容をエラーログに表示します。またバックアップ後、バックアップデータのエラー検査が行えます。これにより、信頼性の高いバックアップデータが作成できます。

フォーマットプログラム付属

リムーバブルディスク(MO、PD、リムーバブル・ハードディスクなど)のフォーマット(論理・物理)が簡単に行える、フォーマットプログラムが付属しています。論理フォーマットではFAT16形式のほかFAT32形式*2を指定することもできます。

*2 FAT32形式のメディアは、Windows98/95(OSR2以降)でのみ使用可能。

DVD-RAMドライブを光ディスクドライブとして利用可能

DVD-RAMドライブ*3を、MOドライブ相当の光ディスクドライブに変換できます。これにより、DVD-RAMディスクでFAT16/32形式の作成や利用が可能になります。また、PC-9800シリーズでDVD-RAMドライブを使用*4することもできます。

*3 弊社動作確認済みDVD-RAMドライブ。

*4 一般にDVD-RAMドライブはPC-9800シリーズには対応していませんが、本機能によりDVD-RAMドライブを通常の光ディスクドライブとして使用することが可能。

プログラムの構成

本製品は主に次のプログラムで構成されています。

SCSI 郎バックアップEZ

ハードディスクの内容を、ドライブ単位でバックアップするためのプログラムです。操作が簡単なので、誰にでも容易にバックアップが行えます。

SCSI郎バックアップDOSリストアラー

バックアップデータをリストア(復元)するためのプログラム*1です。OSが入っているドライブを含む、全てのドライブのリストアが行えます。

*1 DOS上で動作するプログラムです。

ブートディスクメーカー

リストア時に必要な「起動ディスク」を作成するためのプログラムです。

SCSI郎バックアップリネーマ

「SCSI郎バックアップDOSリストアラー」で、一時的にショートファイル名に変更されたロングファイル名を、元のファイル名に戻すためのプログラムです。

SCSI郎MOフォーマッタ

リムーバブルディスク(MO,PD,リムーバブル・ハードディスクなど)をフォーマット(論理/物理)するためのプログラムです。

バイナリファイルコンペア

ファイル同士の内容を比較するプログラムです。ハードディスクに作成したバックアップファイルをCD-R/RW等へ書き込んだ場合、データが正しく書き込めたか検査する際に使用します。

DVD-RAMデバイスタイプチェンジャ

DVD-RAMドライブの装置種別(デバイスタイプ)を、擬似的に光ディスクドライブ(MOドライブ相当)に変換するためのプログラムです。

セットアップ作業

セットアップ作業では、プログラムのインストールと「起動ディスク」の作成を行います。

1 事前確認

本製品を使用するためには、Windows上でSCSI I/FやSCSI装置が正しく動作していることが必要です。事前に次の項目をよく確認してください。

SCSI I/F

- ・SCSIドライバは正しく組み込まれていますか？
- ・Windows上で正しく動作していますか？
詳細はSCSI I/F付属の取扱説明書をご覧ください。

SCSI装置

- ・SCSI装置は正しく設定(ターミネータ、SCSI ID)されていますか？
- ・Windows上で正しく動作していますか？
詳細はSCSI装置付属の取扱説明書をご覧ください。

2 インストール

❶ 既にパソコンに「SCSI 郎バックアップEZ」や「SCSI 郎バックアップキット」がインストールされている場合は(デモ版、旧バージョン含む)、必ず事前に削除しておいてください。

❷ 既に他の商品で「SCSI 郎MOフォーマッタ」*1を使用している場合は、事前にアンインストール*2しておいてください。

*1 SCSI郎WinTool95付属。またMOドライブ等に同梱されている場合もあります。

*2 SCSI郎WinTool95をご利用の場合は一度ソフトアンインストールし、再インストール時に「SCSI郎MOフォーマッタ」をインストールしないよう設定してください。

(1)Windowsを起動し、動作中のプログラムを全て終了します。

(2)パッケージ商品を購入された方は、同梱のフロッピーディスクを使用して次の手順でインストールを行なってください。また、ダウンロード商品を購入された方は購入したプログラムを実行し、画面のガイダンスによってインストールを行なってください。それぞれインストールが終了すると、

[スタート] - [プログラム] の下に [SCSI 郎バックアップ EZ] メニューが追加されます。

[パッケージ商品のインストール]

- (a) [スタート] - [設定] - [コントロールパネル] の順に選択し、[アプリケーションの追加と削除] を実行します。
- (b) [セットアップ] (Windows98 では [インストール]) ボタンを押します。
・「フロッピーディスクまたはCD-ROMからのセットアップ」が表示されます。
- (c) 付属のフロッピーディスク (SCSI 郎バックアップ EZ [DISK1]) をフロッピーディスクドライブに挿入し、[次へ] ボタンを押します。
・「セットアッププログラムの実行」が表示されます。
- (d) 画面にフロッピーディスクの「SETUP.EXE」が正しく表示されていることを確認し、[完了] ボタンを押します。
・本製品のセットアッププログラム画面が表示されます。
- (e) あとは画面のガイダンスにそってインストールを行なってください。

3 起動ディスクの作成

インストールが終了したら「起動ディスク」を作成します。「起動ディスク」は、バックアップファイルをリストア (復元)^{*1} する時に使用するものです。なお、ハードディスクが故障した場合などでシステムが起動しなくなった後では、「起動ディスク」は作成できません。必ず初めに作成してください。

*1 OS を含むリストアができるよう、MS-DOS 環境で行います。

3.1 事前準備

「起動ディスク」から OS (MS-DOS) を起動した状態で SCSI 装置 (MO, PD, リムーバブル・ハードディスク, DVD-RAM 装置など) を利用するためには、使用する SCSI I/F に合った DOS 用 ASPI マネージャ (以後 ASPI マネージャと呼ぶ)^{*1} を「起動ディスク」に組み込むことが必要です。本製品には、一部の SCSI I/F (主にマイクロ・スタッフ製) 用の ASPI マネージャが、あらかじめ同梱されています。このため、対応 SCSI I/F であれば特に ASPI マネージャをユーザが用意する必要はありません。対応 SCSI I/F 以外の SCSI I/F を使

用する場合は、本書「付録」の「3 利用可能 SCSI I/F」をよくお読みのうえ、ASPIマネージャを別途用意してください。なお、ATAPI装置(IDE I/F接続)ご利用の場合は特にユーザ側で用意が必要なドライバはありません。

*1 詳細は、本書「付録」の「3 利用可能 SCSI I/F」をご覧ください。

- ① ノートパソコン用 SCSI I/F(PCMCIA)の ASPI マネージャについて
PCMCIA SCSI I/F の場合、ASPI マネージャはできるだけポイントインネブラ版*2を用意してください。通常の ASPI マネージャでは、別途 PC カードマネージャ*3が必要になり、「起動ディスク」への組み込みもユーザ自身で組み込むことが必要となります。詳細は、本書「付録」の「3 利用可能な SCSI I/F の条件」をご覧ください。

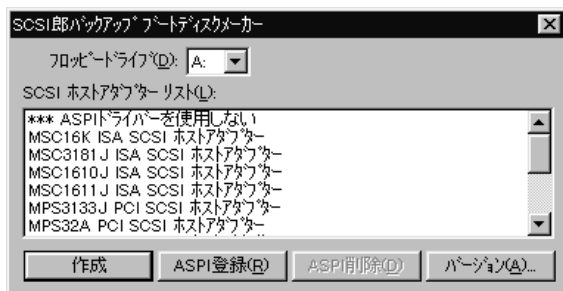
*2 パソコンの PC カードコントローラを直接制御するドライバ。入手や利用条件については SCSI I/F メーカーにお尋ねください。

*3 PCMCIA カードを使用するためのインターフェースドライバ。入手方法等はパソコンメーカーにお尋ねください。

- ① CD-R/RW ドライブをご利用の方へ
CD-R/RW メディアからリストアを行なう場合は、「起動ディスク」に CD-ROM ドライバの組み込みが必要です。DOS 用 CD-ROM ドライバを用意してください。詳細は、本書「注意事項」の「8 CD-R/RW ドライブをご利用の方へ」をご覧ください。

3.2 作成手順

- (1) Windows を起動し、[スタート] - [プログラム] - [SCSI 郎バックアップ EZ] - 「ブートディスクメーカー」の順に選択します。
(開いているウィンドウは全て閉じて作業してください)
・次のメインウィンドウが表示されます。



- (2)「フロッピードライブ」欄に使用するドライブを指定します。
- (3) SCSI ホストアダプタリストから使用するインターフェースの型番を選択し、[作成]ボタンを押します。型番選択に関する注意事項は、次の説明をご覧ください。

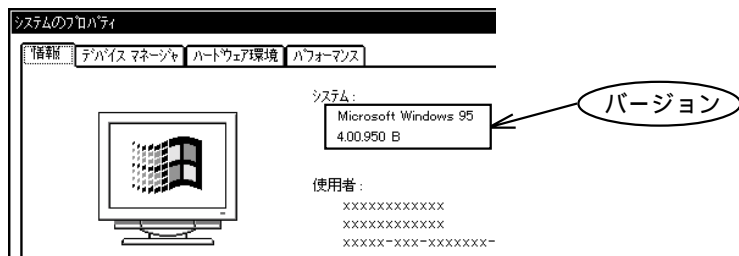
SCSI 装置を使用 「SCSI 装置ご利用の方」(11 頁)参照
 ATAPI 装置を使用 「ATAPI 装置ご利用の方」(13 頁)参照

① SCSI 装置や ATAPI 装置を使用しない場合は、「ASPI ドライバを使用しない」を選択してください。

- (4) 作成確認画面が表示されたら、新しいフロッピーディスク(2HD)¹をドライブに挿入して[OK]ボタンを押します。ディスクの作成が開始されます。
 *1 フロッピーディスクの内容は全て消去されます。
- (5) 終了ガイダンスが表示されたら[OK]ボタンを押し、メインウィンドウ右上の[×]ボタンを押してプログラムを終了します。
- (6) フロッピーディスクを取り出し、「SCSI 部バックアップEZ用 起動ディスク」と書いたラベルを貼ります(以後本書では、このディスクを「起動ディスク」と呼びます)。なお、ラベルにはお使いの Windows のバージョンも記入してください。

[Windows のバージョンの確認方法]

[マイコンピュータ] - [コントロールパネル] - [システム] を実行し、[システム：] の項に表示されている Windows のバージョンをメモします。



① Windows は以下のバージョンで FAT32 がサポートされています。

- ・ Windows 95 (OSR2 [4.00.950B] 以降)
- ・ Windows 98

(7)以上でディスクの作成は終了です。「3.3 動作確認」に進んでください。

① ノートパソコン用 SCSI I/F(PCMCIA)をご利用の方へ
ポイントインナー版以外の ASPI マネージャをご利用の方は*2、次項に進む前に「起動ディスク」に PC カード マネージャ の組み込みを行なってください。なお、本書「付録」の「3 利用可能な SCSI I/F」に SCSI I/F 利用条件などが紹介されています。よくお読みください。

*2 詳細は「2 事前準備」をご覧ください。

① PC-9800 シリーズをご利用の方へ
FAT32 形式の光ディスクを使用する場合は、「起動ディスク」に追加作業が必要です。詳しくは、本書「注意事項」の「6 SCSI I/F 別注意事項」をご覧ください。

① CD-R/RW ドライブをご利用の方へ
CD-R/RW メディアからリストアを行う場合、「起動ディスク」に CD-ROM ドライバの組み込みが必要です。詳しくは、本書「注意事項」の「8 CD-R/RW ドライブをご利用の方へ」をご覧ください。

SCSI 装置ご利用の方

SCSI ホストアダプタリストにお使いのSCSI I/Fの型番がある場合(対応SCSI I/F)は、これを選択します。なお、リストにSCSI I/Fの型番がない場合は、お使いのSCSI I/F用ASPIマネージャを別途用意し、次からの「ASPIマネージャ登録方法」にそって、SCSI ホストアダプタリストに型番を登録してください。

① PC-9821シリーズご利用の方へ

SCSI I/FにNEC製PC-9801-92/100, PC-9821X-B02/B02L/B09(互換SCSI I/F含む)を使用している場合は、SCSI ホストアダプタリストの「PC-98 BIOS SCSIホストアダプター」を選択してください。

① MPS3210/3211Jご利用の方へ

一部のDOS/V機では、パソコンのシステムBIOS^{*1}(AMI, Phoenix, Awardなど)内に、NCR社やSymbios社製SCSIコントローラ(53C8xx)用のSCSI BIOSが埋め込まれている場合があります^{*2}。このようなパソコンにMPS3210JやMPS3211Jを装着した場合、仕様上MPS3240J(SCSI BIOS付SCSI I/F)を装着したことになります。この場合、SCSI I/Fの型番選択では「MPS3240J PCI SCSIホストアダプター」を選択してください。

*1 パソコン搭載ソフト。基本的なハードウェアのコントロールを行いません。

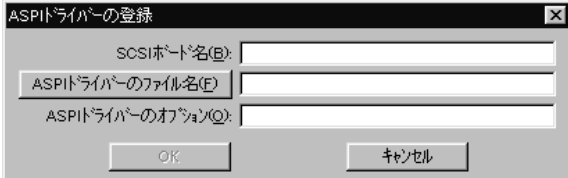
*2 サポートしている場合、パソコン起動時のメモリカウント後に「NCR・・・PCI SCSI BIOS・・・」や「Symbios Logic・・・PCI SCSI BIOS・・・」といったSCSI BIOS起動メッセージと、接続SCSI装置一覧が表示されます。

[ASPIマネージャ登録方法]

ASPIマネージャを準備し(ハードディスクまたはフロッピーディスクにコピーしておきます)、次の操作を行ってください。

(1)画面内の「ASPI登録」ボタンを押します。

・次の画面が表示されます。



ASPIドライバの登録

SCSIポート名(B):

ASPIドライバのファイル名(F):

ASPIドライバのオプション(O):

OK キャンセル

(2)画面内の各項目を設定します。

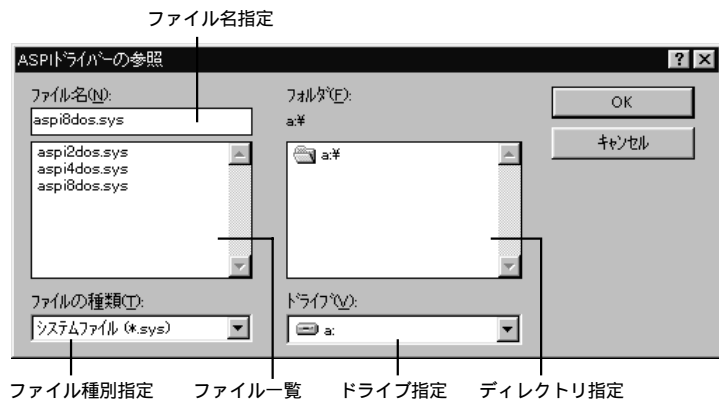
[SCSI ボード名]

SCSI I/Fの型番を入力します。

[ASPI ドライバーのファイル名]

ASPI マネージャを指定します。[ASPI ドライバーのファイル名]ボタンを押し、ハードディスクまたはフロッピーディスクに用意したファイルを指定*1します。

*1 ドライブ、ディレクトリを指定し、ファイル一覧で目的のファイルをダブルクリックします。

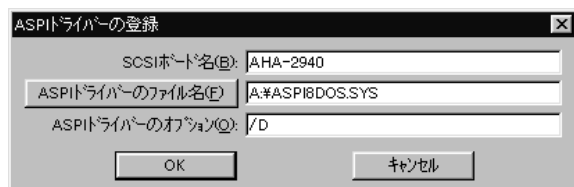


①

[ASPI ドライバーのオプション]

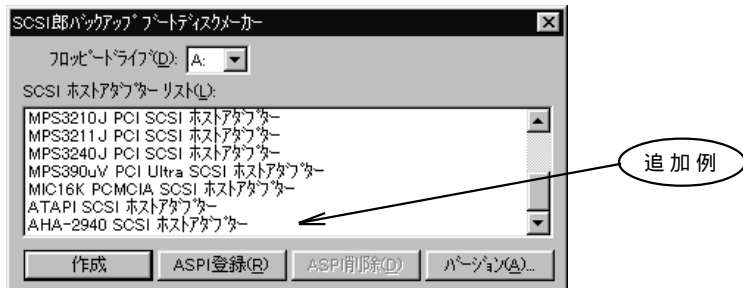
ASPI マネージャに付加するオプションスイッチを入力*3します。

*3 付加するオプションが無ければ入力する必要はありません。オプションの詳細はSCSI I/Fの取扱説明書をご覧ください。



(3)画面内の[OK]ボタンを押します。

・SCSIホストアダプターリストに情報が追加されます。



① 登録内容を間違えた場合、SCSI I/Fの型番を選択して[ASPI削除] ボタンを押せば登録データは削除できます。データを削除した場合は、再度ASPIの登録を行ってください。

ATAPI 装置ご利用の方

ATAPI MO/PD 装置(IDE I/F 接続)ご利用の方は、SCSI ホストアダプターリストの「ATAPI SCSIホストアダプター」を選択してください。

3.3 動作確認

作成された「起動ディスク」が正しく動作することを確認し、「装置 - ドライブ名対応表」を作成します。

(1) フロッピーディスク装置に「起動ディスク」を挿入します。

(2) [周辺機器] [パソコン]の順に電源を入れます。

DOS/V機, PC98-NXシリーズ

システム起動途中でキーボードタイプ指定画面が表示されます。画面の指示に従い、キーボードタイプを指定してください。

・「SCSI 郎バックアップ DOS リストアラー」が自動的に起動します。

PC-9800シリーズ

・「SCSI 郎バックアップ DOS リストアラー」が自動的に起動します。

(3) [ESC]キーを押してリストアソフトを終了します。

・DOSのコマンドプロンプト画面が表示されます。

X:¥>

(xはRAMディスクのドライブ名)

(4) リムーバブルディスク装置が正しく動作することを確認します。

① SCSI 郎 card (MIC16K) ご利用の方へ

SCSI装置が正しく認識されない場合は一度パソコンの電源を切り、装着するPCカードスロットを変えて^{*1}みてください。なお、本書「注意事項」の「7 SCSI 郎 card ご利用の方へ」に利用時の制限事項や注意事項が記載されています。こちらもよくお読みください。

*1 初期状態はPCカードスロット0番で動作します。

(5) 次の手順にそって「装置 - ドライブ名対応表」を作成します。この表は、バックアップ/リストアの際に必要な重要なものです。必ず作成してください。(用紙は「付録」に添付のものをコピーしてご利用ください)

① ハードディスクからOSを起動する場合と、「起動ディスク」からOSを起動する場合は、各ドライブ装置(FD, ハードディスク, MOなど全て)のドライブ名が変わることがあります。リストア時のドライブ名指定で間違いが起こらないよう、十分ご注意ください。

[作成手順]

- (a) フロッピーディスク装置、ハードディスク装置の全ドライブ、リムーバブルディスク装置(MO,PD,DVD-RAM, リムーバブル・ハードディスクなど)のドライブ名を調べ、「装置 - ドライブ名対応表」に記入します。ドライブ名の確認はDOSの「DIR」コマンドを使用します。操作は、下のA(ドライブ名)の入力部分をB:,C:,...と順次変えてドライブの内容を調べ^{*2}、その内容から装置を判断します。特にハードディスク装置のドライブ名が複数ある場合は、あとでその違いがわかるようにドライブの全容量やディスク内の代表的なファイル名をメモしておいてください。

^{*2} 事前にデータが記録されたメディアを挿入しておいてください。

```
X:¥> DIR A: [ Enter ]
```

① RAMディスクドライブについて

「起動ディスク」からOSを起動した場合、FD内に圧縮されているファイル展開用にRAMディスクドライブ^{*3}が作成されます。ドライブ名が1つ増えるため、ハードディスクからOSを起動した場合とはドライブ名の順等が異なる場合があります。

^{*3} メモリ上に作られた仮想ドライブ。

① DVD-RAMドライブをご利用の方へ

UDF形式のDVD-RAMディスクにはDIRコマンドは使用できません。本製品付属の「UDFDIR」^{*4}をご利用ください。

^{*4} 本書「ユーティリティ」の「2.1 UDFディスクのディレクトリ表示」参照。

- (b) 「起動ディスク」を抜いてパソコンを再起動します。Windows起動後、上記の各装置のドライブ名を調べて「装置 - ドライブ名対応表」に記入します。なお、ハードディスクのドライブ名が複数ある場合は、先に調べたドライブの全容量や代表的なファイル名をもとに、ドライブを区別^{*5}してください。

^{*5} ハードディスクのドライブ名は、「起動ディスク」からOSを起動した時と同じ順番で連続しているとは限りません。入れ替わることもあります。

[記入例] PC-9800 シリーズの場合 (用紙は本書「付録」に添付)

装置 - ドライブ名対応表

No	装置名	ドライブ名	
		ハードディスク から OS 起動	起動ディスク から OS 起動
1	フロッピーディスク	C :	A :
2	ハードディスク No1 区画 1 (1GB)	A :	B :
3	ハードディスク No1 区画 2 (600MB)	B :	C :
4	CD-ROM	D :	-(*1)
5	MO	E :	D :
6	RAM ディスク	-	E :
7			
8			
9			
10			
11			
12			

パソコンで使用できるディスク装置を記入

ハードディスクは、ハードディスク番号、区画番号()、容量などを記入

1 台のハードディスクは、複数の区画に分割されている場合があります。

ハードディスクからシステムを起動した場合の、各装置のドライブ名を記入

「起動ディスク」からシステムを起動した場合の、各装置のドライブ名を記入

*1 CD-ROM は認識されません。
(「起動ディスク」に CD-ROM 用デバイスドライバが無いため)

(6)以上で作業は終了です。「起動ディスク」は OS のリストアに備え、大切に保存してください。

機能/操作説明

1 バックアップ

ハードディスクの内容をバックアップしておくと、ハードディスクが壊れた時や、誤ってハードディスクのデータを削除した時に、大切なパソコン環境やデータを失わずに済みます。本製品では、ハードディスクの内容をドライブ単位でバックアップすることができます。ここでは、バックアップの基本的な操作手順について説明します。なお、バックアップを始める前に、次の注意事項をよくお読みください。

① ドライブバックアップ時の注意

バックアップ元となるハードディスクには、事前に10MB以上の空き領域を作ってください。また、起動ドライブをバックアップする場合は本書「注意事項」の「4 起動ドライブをバックアップする方へ」をよく読んでから作業を始めてください。

① ハードディスクの内容確認、不要データの削除

ハードディスクにはscandiskやchkdskをかけて、エラーがある場合は修復しておいてください。また、Windowsの「ごみ箱」は空にしてください。無駄なデータのバックアップを避けることができます。

① 常駐ソフトの解除 / アンインストール

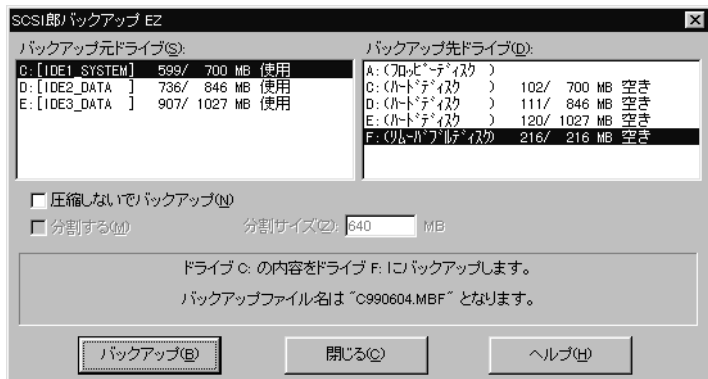
パソコン起動時に自動的に動作するソフト(アプリケーションソフト、ウィルスチェックソフトやシステム監視ソフトなどの常駐ソフト)がある場合、自動的に動作しないように一時的に設定を変更するか、ソフトをアンインストールしてください^{*1}。常駐ソフトが動作しているとバックアップ時に関連するファイルが保存できない場合があります。また、リストア作業中のWindows再起動時にエラーが表示されることがあります。

^{*1}本ソフトは極力常駐ソフトの影響を受けないよう、専用シェル上で動作するよう作成されています。ただし、常駐ソフトの仕様によっては問題が生じることもあるため、安全上この対応をお願いします。なお、常駐していてもバックアップ/リストア時に問題(エラー表示等)が起これなければ、常駐したままでもかまいません。

(株)シマンテック社のNorton Utilitiesをご利用の方へ
バックアップ時はソフトをアンインストールしておいてください。インストールしたままバックアップ作業を行なうと、バックアップ中にエラーが表示されたり、リストア作業時のWindows起動時にエラー(実行するプログラムが見つからないなど)が表示されます。

- (1) Windows を起動し、動作中のプログラムを全て終了した状態で、[スタート] - [プログラム] - [SCSI 郎バックアップ EZ] - 「SCSI 郎バックアップ EZ」の順に選択します。

・SCSI 郎バックアップ EZ メインウィンドウが表示されます。



バックアップ元やバックアップ先指定画面には、各ドライブの情報(ボリューム名、総容量、使用領域、空き領域など)が表示されます。

① バックアップ作業は、専用画面(シェル)上で行ないます。専用画面では、「SCSI 郎バックアップ EZ」以外に「SCSI 郎 MO フォーマッタ」などが実行できます。

- (2) バックアップするドライブの容量(使用領域)を確認し、容量分のディスク(MO, PD, リムーバブル・ハードディスクなど)を準備^{*1}します。

*1 バックアップファイルの容量はバックアップ条件(ファイルの圧縮/非圧縮)により変わりますが、安全上バックアップする容量分を用意してください。なお、メディアは事前にフォーマットしておいてください。

- (3) メインウィンドウの各項目を設定します。

[バックアップ元ドライブ]

バックアップ元のドライブを指定します。

[バックアップ先ドライブ]

バックアップ先のドライブを指定します。

[圧縮しないでバックアップ]

バックアップデータを圧縮しない場合は、チェックボックスをチェックします。バックアップデータ容量は増えますが、圧縮を行なわないためバックアップ時間の短縮(特にCPUパワーが低いパソコン)が図れます。

[分割する](バックアップ先がハードディスクの場合のみ設定可能)

バックアップファイルの分割の有無を指定します。チェックボックスをチェックすると、指定した容量でバックアップファイルを分割しながらバックアップを行ないます(以後「分割バックアップ」と呼ぶ)。本機能は主にCD-R/RW書き込み用のバックアップファイルを作成する場合に使用します*2。

*2 CD-R/RWメディアには直接バックアップファイルを作成することはできません。一度ハードディスクにバックアップファイルを作成し、これをCD-R/RWメディアに保存します。

[分割サイズ](上記[分割する]を指定した場合のみ設定可能)

バックアップファイルを分割する場合、ファイルの分割容量を指定します。初期値は640MB(CD-R/RW 用)です。

① ネットワークをご利用の方へ

「バックアップ先ドライブ」には、ネットワークドライブを指定することもできます。但し、システムを含むドライブをネットワークドライブにバックアップしても、ネットワークドライブからリストアすることは出来ません*3。ネットワークドライブは、データ保存用ドライブのバックアップ*4やCD-R/RW書き込み用バックアップファイル作成時(分割バックアップ)の作業等にご利用ください。

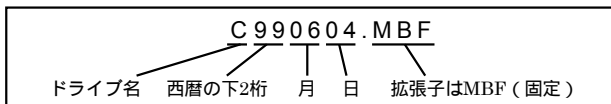
*3「起動ディスク」で起動したDOS環境ではネットワークドライブが認識できないため。

*4 データ保存用ドライブであれば、Windows上からリストア作業を行なうことができます。詳しくは、「2. リストア」をご覧ください。

(4) 画面に表示されているバックアップファイルの名称やファイルが作成されるフォルダをメモします。リストアの時に必要になる大切な情報です。必ずメモしておいてください。

① バックアップファイルの名称

バックアップ先ドライブに保存されるファイル(バックアップファイル)の名称は、次の条件で自動的に決定されます。



バックアップファイルのサイズが単独で2GBを超えてしまうような場合、2GBを超えた分のデータは別ファイル名に保存されます。詳しくは、オンラインヘルプをご覧ください。

① バックアップファイル作成先

バックアップ先がFDやリムーバブルディスク(MO,PD,DVD-RAM など)の場合、バックアップファイルはディスクのルート(¥)ディレクトリに作成されます。また、バックアップ先がハードディスクの場合は、次の場所にバックアップファイルが作成されます。

ファイルを分割しない場合

¥SBEZDATA

ファイルを分割する場合(分割バックアップ)

¥SBEZDATA ¥[バックアップドライブ名]年[月]日].MBD ¥DISK_XXX

ディスク枚数分のディレクトリ(DISK_001, DISK_002・・・)が作成され、この中にバックアップファイルが格納されます。

(例) Cドライブを1999年6月4日に分割バックアップした場合

¥SBEZDATA ¥C990604.MBD ¥DISK_001 (Disk1用)

¥SBEZDATA ¥C990604.MBD ¥DISK_002 (Disk2用)

:

[注意]

¥SBEZDATAはSCSI 郎バックアップEZ専用ディレクトリです。バックアップ時にハードディスクに¥SBEZDATAが存在した場合、¥SBEZDATA以下はバックアップされません。¥SBEZDATA以下のファイルをバックアップしたい場合は、ファイルを他のディレクトリに移してください。

(5) [バックアップ]ボタンを押します。

(6) バックアップ先がハードディスクの場合は、バックアップが始まります。また、バックアップ先がリムーバブルディスクの場合は、一度メディアの装着要求画面が表示されます。メディアをドライブに挿入し、[OK]ボタンを押してバックアップを開始してください。

・バックアップが始まります。

バックアップ先がリムーバブルディスクの場合、バックアップ途中でメディアの交換要求画面が表示されることがあります。この場合は、指示に従いメディアを交換してください。なお、リストアに備えてメディアのラベルには次の情報を記入してください。

バックアップファイル名(xxxxxxxx.MBF)

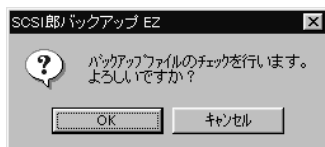
メディア番号(Disk1、Disk2、Disk3・・・)

① メディアを交換する場合は、ドライブのアクセスランプが消えてから行ってください。

(7)バックアップが終了したら「エラーログ」にエラーが表示されていないことを確認し、ドライブのアクセスランプが消えてから[閉じる]⁵ボタンを押します。

*5 バックアップが終了すると画面内の[中止]ボタンが[閉じる]に変わります。

・次の確認メッセージが表示されます。

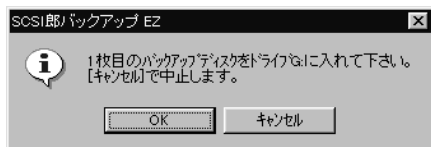


① エラーログにエラーが表示された場合、他にソフト(常駐ソフトなど)が動作していないか確認してください。(17頁の注意事項参照)

(8) [OK]ボタンを押し、バックアップファイルの検査を行ないます。

([キャンセル] で検査をスキップすることも出来ます)

・次のメッセージが表示されます。



① ここでは、作成されたバックアップファイルのエラー検査が行われます。信頼性の高いバックアップファイルを作成するためにも、検査は必ず行うようにしてください。

- (9)1枚目のメディアをドライブに挿入し、[OK]ボタンを押します。なお、途中でメディアの交換要求がある場合は、指示に従いメディアを交換してください。

① バックアップメディアが1枚の場合は、一度メディアをドライブから取り出し、再挿入してから[OK]ボタンを押してください(ドライブのキャッシュがクリアされ、より確実な検査が行なえます)。

- (10)バックアップファイルの検査が終了したら、「エラーログ」にエラーが表示されていないことを確認し、[閉じる]^{*6}ボタンを押します。

^{*6} 検査が終了すると画面の[中止]ボタンが[閉じる]に変わります。

・「SCSI 郎バックアップ EZ」メインウィンドウに戻ります

① エラーが表示された場合、バックアップファイル自体に問題があります。再度バックアップを行なってください^{*7}。
^{*7} エラーが再度起こる場合は、メディアを交換してみてください。

- (11)[閉じる]ボタンを押して「SCSI 郎バックアップ EZ」を終了します。

- (12)全てのソフトを終了した状態^{*8}で、「シェル for SCSI 郎バックアップ EZ」の「終了(エクスプローラ)」ボタンを押します。

^{*8} 「SCSI 郎 MO フォーマッタ」など他のソフトが動作していると、「終了(エクスプローラ)」ボタンは押せません。

- (13)以上でバックアップは終了です。なお、ハードディスクに分割バックアップを行なった方は、次頁の手順でバックアップファイルをCD-R/RWメディア等に保存してください。

① リムーバブルディスク(MO,PDなど)にバックアップを行った場合は、メディアを書き込み禁止にして大切に保管してください。

分割バックアップを行なった方へ

ハードディスク内のバックアップファイルを、次の手順でメディアに保存してください。

- (1)ハードディスクに、メディア毎のディレクトリが作成されています。各ディレクトリ内のバックアップファイル^{*1}を、メディアのルートディレクトリ(¥)に保存^{*2}します。

^{*1} ファイルは通常1つ(xxxxxxxx.MBF)ですが、分割サイズの指定を2GByte以上にした時は、ディレクトリ内に複数のファイルが作成される場合があります。

^{*2} CD-R/RWへの保存はCD-R/RWドライブ付属の書き込みプログラム等で行ないます。

¥(BK_DIR) ¥ DISK_001 : Disk1 用バックアップデータ

¥(BK_DIR) ¥ DISK_002 : Disk2 用バックアップデータ

⋮

(BK_DIR)はバックアップ先ディレクトリ。ディレクトリの詳細は、20頁の「バックアップファイル作成先」をご覧ください。

- (2)各メディアのラベルに次の情報を記入します。

バックアップファイル名(xxxxxxxx.MBF)

メディア番号(Disk1、Disk2、Disk3・・・)

- (3)メディアに保存したファイルとハードディスクの元ファイルと比較し、ファイルが完全に同じであることを確認します。比較は、SCSI郎バックアップEZ付属のバイナリファイルコンペア(ファイル比較プログラム)で行ないます。信頼性の高いバックアップファイルを作成するためにも、ファイルの比較は必ず行なってください。バイナリファイルコンペアの使用方法については、「ユーティリティ」の「1.2 バイナリファイルコンペア」をご覧ください。

- (4)各メディアへの保存、比較が問題なく完了したら、ハードディスク内のバックアップファイルを削除します。

① ハードディスクを効率良く利用するために、不要になったバックアップファイルやフォルダは、ハードディスクから削除してください。

2 リストア

ハードディスクが壊れた時や、誤ってハードディスクのデータを削除した場合は、バックアップデータをハードディスクにリストア(復元)することで、パソコンの動作環境や各種データを復元することが出来ます。本製品には、バックアップデータをドライブ単位でリストアすることができる「SCSI郎バックアップDOSリストアラー」が付属しています。ここでは、リストアの基本的な操作手順について説明します。

[注意事項]

「SCSI郎バックアップDOSリストアラー」では、起動ドライブ(OSが入っているドライブ)のリストアができます。但し、正しい作業を行わないとデータをリストアしてもパソコンが正しく起動しない場合や、大切なデータを失うことがあります。次の注意点をよく確認してから、作業を始めてください。

事前に、本書「注意事項」の「4 起動ドライブをバックアップする方へ」に書かれている注意事項をよくお読みください。

操作内容により、ハードディスク内の全データが消去されます。必ず、事前にハードディスクの全区画(ドライブ)をバックアップしてください。

本リストアで戻せるシステムはWindows95/98のみです。他のOSには対応していません。他のOS^{*1}やOS切り替えソフト^{*2}が入っているドライブにはバックアップデータを戻さないでください。バックアップデータを戻すとハードディスク内のOS領域が変更または消去されるため、OSが正しく起動しなくなります。

*1 PC-9800シリーズをご利用の方で、他のドライブに異なるOSを入れて切り替え運用している場合など。

*2 ソフトポート社のSystemCommanderなど。

リストアは既存のハードディスクと同等か、それ以上の容量のハードディスクに対して行ってください。

ハードディスクの内容は、バックアップした時点の状態に戻ります。バックアップ以後に作成/変更した各種データ(ワープロデータや、表計算、CADデータなど)は、必ず事前にバックアップしておいてください。

2.1 事前準備

次のハードディスクにバックアップデータをリストアする場合は、リストアを行う前にFDISK^{*1}コマンドでハードディスクの区画(パーティション)を正しく作成^{*2}してください。

新しく購入したハードディスク

他のパソコンで使用していたハードディスク

他の SCSI アダプタで使用していたハードディスク

なお、FDISK による区画の作成方法については、本書「付録」の「1 FDISK による区画の作成」をご覧ください。

*1 「起動ディスク」に Windows 付属の FDISK.EXE がコピーされています。

*2 既にパーティションがある場合は、全ての区画を一度削除してから再度作成します。

2.2 操作手順

(1) 「起動ディスク」^{*1}をフロッピーディスク装置に挿入します。

*1 本書「セットアップ作業」の「3 起動ディスクの作成」参照。

① 起動ディスクについて

必ずバックアップを行ったパソコンで作成したものを使用してください。Windowsは発売時期により複数のバージョンが存在し、バージョンにより区画作成ソフト(FDISK.EXE)の仕様などが異なります(一部 OS^{*2}は FAT32 にも対応)。ご注意ください。

*2 Windows98/95(OSR2以降)。

(2) [周辺機器] [パソコン]の順に電源を入れます。

DOS/V 機, PC98-NX シリーズ

システム起動途中でキーボードタイプ指定画面が表示されます。画面の指示に従い、キーボードタイプを指定してください。

・「SCSI 郎バックアップ DOS リストアラー」が自動的に起動します。

PC-9800 シリーズ

・「SCSI 郎バックアップ DOS リストアラー」が自動的に起動します。

```
SCSI 1 バックアップ  DOS リストア  Vx.xx
ドライブ C: IDE1_SYSTEM 700 MB [C]
ドライブ D: IDE2_DATA 846 MB [D]
ドライブ E: IDE3_DATA 1,027 MB [E]
ドライブ F: SCSI1 498 MB [F]
展開先ドライブを選択して下さい。
```

- (3) 展開先ドライブ*2を選択します。(展開先ドライブが1つの場合は確認のみ)
*2 バックアップデータをリストア(復元)するドライブ。

① 項目の選択について

本プログラムでは各所で選択画面が表示されます。画面で反転表示されている項目は、その項目が選択されていることを表します。項目を変更する場合は、キーボードの矢印キー([], [], [], [])を使用して変更してください。

① 展開先ドライブ名について

バックアップデータは、バックアップした時と同じハードディスクの区画に戻してください。特に、リストアではフロッピーディスク(「起動ディスク」)からOSを起動するため、パソコンの環境によっては同じ区画でもドライブ名が変わる場合があります(特にPC-9800シリーズをご利用の方はご注意ください)。必ず「装置 - ドライブ名対応表」*3でドライブ名をよく確認してください。

*3 本書「セットアップ作業」の「3.3 動作確認」参照。

(例) 次のパソコン環境では、区画1(バックアップ時A:)のバックアップデータはB:に、区画2(バックアップ時B:)のバックアップデータはC:に戻します。

装置 - ドライブ名対応表

No	装置名	ドライブ名	
		ハードディスクからOS起動	起動ディスクからOS起動
1	フロッピーディスク	C:	A:
2	ハードディスクNo1 区画1 (1GB)	A:	B:
3	ハードディスクNo1 区画2 (600MB)	B:	C:
	:	:	:

- (4) [Enter]キーを押します。
・次の画面が表示されます。

ドライブ x: のハードディスクを初期化しますか？
[はい] [いいえ] [キャンセル]

- (5) [はい]を選択して[Enter]キーを押し、ハードディスクのボリューム名を入力します。

⚠ 初期化すると、ドライブの内容は全て削除されます。ご注意ください。

- ・次の画面が表示されます。

起動に必要なシステムファイルをドライブ x: にコピーしますか？
[はい] [いいえ] [キャンセル]

- (6) リストアするドライブに合わせて次のように操作し、指示に従いハードディスクをフォーマットします*4。

*4 フォーマット実行確認でNoを選択すると、エラーを表示してソフトが終了します。

起動ドライブ (OSが入るドライブ)

: [はい]を選択し[Enter]キーを押します。

(フォーマット後、システムの転送が行われます)

起動ドライブ以外のドライブ

: [いいえ]を選択して[Enter]キーを押します。

- ・フォーマット終了後、次の画面が表示されます。

```
SCSI郎バックアップ DOSリストア- Vx.xx
G:
G: ¥*.MBF
A: <FLOPPY>
C: IDE1_SYSTEM <HARD DISK> 103/ 700 MB
D: IDE2_DATA <HARD DISK> 150/ 846 MB
E: IDE3_DATA <HARD DISK> 58/ 1,027 MB
F: SCSI1 <HARD DISK> 488/ 498 MB
G: <RMV DISK> 120/ 120 MB

バックアップファイルを選択して下さい。
```

画面には、各ドライブの情報 (ボリューム名、ディスク種別、空き容量 / 総容量) が表示されます。

(7)バックアップファイルを指定します。指定はドライブ名、バックアップファイル名の順に指定してください。なお、リムーバブルディスクの場合は、Disk1のファイルを指定してください(分割バックアップでハードディスクに作成したバックアップファイルも指定できます)。

・ファイル名一覧には拡張子"MBF"のものだけが表示されます。

(8)バックアップファイルを選択して[Enter]キーを押します。

・展開確認メッセージが表示されます。

このバックアップファイルを展開します。

よろしいですか？

[OK] [キャンセル]

(9)[OK]を選択します。

(10)バックアップファイルの展開確認が表示されるので、[Enter]キーを押します。バックアップファイルがハードディスクにある場合は、リストアが始まります。また、バックアップファイルがリムーバブルディスクにある場合は、一度次のメディアの装着要求画面が表示されます。[Enter]キーを押してリストアを開始してください*5。

*5 途中、メディアの交換要求がある場合は指示に従いメディアを交換してください。

1枚目のバックアップディスクをドライブ x: に入れてください。

[キャンセル] で中止します。

OK / キャンセル => OK

(11)リストアが終了すると、次のメッセージが表示されます。

バックアップファイルの展開が終了しました。

何かキーを押してください。

(12)[Enter]キーを押します。

・次の画面が表示されます。

もう一度バックアップファイルを展開しますか？

[はい] [いいえ]

(13)作業に合わせ、次のように操作します。

他のドライブのリストアを行う場合

:[はい]を選択し[Enter]キーを押します。

(本章項番(3)に戻ります)

リストアを終了する場合

:[いいえ]を選択して[Enter]キーを押します。

・終了メッセージが表示されます。

(14)終了メッセージを確認のうえ、[Enter]キーを押します。

(15)フロッピーディスクをフロッピーディスク装置から抜いて、指示に従いパソコンを再起動します。

・Windows 起動後、次のメインウィンドウが表示されます。



① 常駐ソフトを組み込んだ状態でバックアップした場合、Windows 起動時にエラー(ファイルが見つからない等)が表示される場合があります。これは、ログファイル名のディレクトリやファイルが、この時点ではまだ完全に復元出来ていないためです。常駐ソフトは、バックアップ時には外しておいてください。(17頁の注意事項参照)

(16) [開始] ボタンを押します。

① この作業により、一時的にショートファイル名に変換されているログファイル名が復元されます。

(17)リネームが終了したら、「ログ」にエラーが表示されていないことを確認します(総エラー数が0であることを確認してください)。

(18) LFN2SFNファイルの削除確認が表示されたら[OK]ボタンを押し、ファイルを削除します。

① LFN2SFNファイルの削除確認メッセージは、リストア中のハードディスクドライブ数表示されます。

(19) 画面右上の[×]ボタンを押してプログラムを終了します。

(20) ログファイルの保存確認画面が表示されます。エラーログを保存する場合のみ[はい]を選択してログを保存*6してください。なお、保存の必要がない場合は[いいえ]を選択してください。

*6 保存先ドライブ、ファイル名はユーザが指定してください。

(21) 画面の指示に従いWindowsを再起動します。

① 圧縮ドライブをご利用の方へ

リストアした圧縮ドライブデータを、Windowsで正しくドライブとして使用するためには、圧縮ドライブデータのマウントが必要です。詳しくは、ドライブスペースなどのオンラインヘルプで確認してください。

① リストア作業について

Windowsが正しく動作している環境であれば、データ保存用ドライブに限り次の方法でリストア作業をWindows上から行なうこともできます*7。
[スタート]-[プログラム]-[SCSI郎バックアップEZ]の順に選択し、「SCSI郎バックアップDOSリストアラー」*8を起動します。あとは本章項番(3)~(14)の手順にそってリストア作業*9を行なってください(項番(16)以降のロングファイル名変換作業は不要です)。

*7 Windows起動中は、起動用ハードディスクなどWindows関連のファイルが入ったハードディスクに対するリストア作業は行なわないでください。

*8 使用する場合は、事前に本書「付録」の「5 DOSリストアラーのアイコン設定」にそって、動作環境を正しく設定してください。

*9 「装置 - ドライブ名対応」は、「起動ディスク」からOSを起動した場合と異なります。HDからOSを起動(Windows環境)時の状態になります。ご注意ください。

3 フォーマット

本製品には、簡単な操作で光ディスク(MO,PDなど)やリムーバブル・ハードディスクのフォーマット(物理フォーマット/高速論理フォーマット)が行える、「SCSI 郎 MO フォーマッタ」が付属しています。ここでは、「SCSI 郎 MO フォーマッタ」でリムーバブルメディアのフォーマットを行う場合の操作手順について説明します。なお、詳しい説明はオンラインヘルプをご覧ください。

- (1)メディアをリムーバブルディスク装置に装着します。
- (2)動作中のプログラムを全て終了し、[スタート]-[プログラム]-[SCSI郎バックアップEZ]-[SCSI郎MOフォーマッタ]の順に選択します*1。

*1 [マイコンピュータ]のリムーバブルディスクアイコンを右ボタンでクリックし、メニューから[SCSI郎MOフォーマッタ]を選択することも可能(画面は一部異なります)。

・次のメインウィンドウが表示されます。



- (3)ダイアログの各項目を設定します。

[ドライブ情報]

リムーバブルディスク装置を指定*2します。

*2 リムーバブルディスク装置が1台の場合は、起動時から選択されています。

[論理フォーマット形式]

論理フォーマット形式を指定*3します。

通常は「IBM」(Windows標準形式)を選択してください。

*3 各フォーマット形式の詳細は、本章最後の「フォーマット形式」をご覧ください。

[物理フォーマット]

論理フォーマットを行う前に物理フォーマット*4を行う場合は、チェックボックスをチェックします。

*4 メディアは物理フォーマット済みで販売されています。このため、物理フォーマットは必須ではありません。物理フォーマットを行うと、お使いのリムーバブルディスク装置と最も相性のよいメディアが作成できます。

[フォーマット後自動で取り出す]

フォーマット後、メディアをイジェクトする場合は、チェックボックスをチェックします。連続してメディアをフォーマットする場合などに便利です。

(4) [実行] ボタンを押します。

- ・フォーマット設定画面が表示されます。

(5) [OK] ボタンを押します。

- ・フォーマットが始まります。

❗ フォーマット設定画面では、ディスク内の技術的な情報(データ開始位置やクラスタサイズなど)を細かく指定することができます。ただし、通常は特に指定する必要はありません。初期値の「自動設定」のまま先に進んでください。フォーマット設定の詳細はオンラインヘルプをご覧ください。

☠ フォーマットすると、メディア内のデータは全て削除され、復元できません。大切なデータが記録されている場合は、必ずバックアップしてからフォーマットを行ってください。

❗ フォーマット時間について
論理フォーマットは1～2秒で終了します。なお、物理フォーマットを一緒に行う場合は、10～90分程度*5かかります。
*5使用するSCSI装置や、メディアの容量により異なります。

(6) フォーマットが完了したら、[閉じる] ボタンを押します。

- ・メインウィンドウに戻ります。

(7) ひき続きメディアのフォーマットを行う場合は、メディアを交換して再度順番(3)から作業を行ないます。

(8) 画面右上の[×] ボタンを押してプログラムを終了します。

[フォーマット形式]

主な論理フォーマット形式(一部)について説明します。

フォーマット形式	内 容
IBM	IBM社が規定した論理フォーマット形式で、SFD(スーパー・フロッピーディスク)形式とも呼ばれます。IBM形式は各種OS(Windows95/98など)やデバイスドライバで幅広くサポートされています。
セミ IBM	IBM形式をDOS Ver 3.xの環境 ^{*6} でも利用できるようにしたフォーマット形式です。DOS Ver 3.xのコンピュータ ^{*7} とデータ交換を行う場合にのみ使用してください。
IBM(FAT32)	FAT16のIBM形式をFAT32としたフォーマット形式です。FAT16では扱えなかった2GB以上のメディアを、1つのパーティションで使用できます ^{*8} 。
FDISK(1パーティション)	IBM社が規定したハードディスク用の論理フォーマット形式です。主にWindows NTでサポートされています。IBM形式をサポートしていないOSとの間でデータ交換をする場合は、この形式を選択して下さい。
FDISK(1パーティション FAT32)	FDISK 1パーティション形式の論理ドライブをFAT16からFAT32としたフォーマット形式です。FAT16では扱えなかった2GB以上のメディアを1つのパーティションで使用できます ^{*8} 。

*6 IBM形式は、DOSではDOS Ver 4.x以降でしか使用できません。

*7 セミ IBM形式のメディアが読み書きできる環境を持つもの。

*8 FAT32形式ディスクは、Windows 98/95(OSR2以降)でのみ使用可能。2GB以上のディスクでのみご利用ください。なお、FAT32未サポートOSでは2GB以上のディスクもFAT16形式でフォーマットしてください。この場合2GBのみ使用できます。

[注意事項]

メディアをフォーマットする時は、動作中のアプリケーション^{*9}は全て終了してください。また、ドライブが共有(LANなど)されている場合は共有から外してください。

*9 メディアにアクセスする可能性のある常駐ソフトを含む。

Windows 95(NEC版)を使用している場合は、MOメディアをFDISK形式でフォーマットしないでください^{*10}。

*10 Windows95(NEC版)はMOに対してFDISK形式をサポートしていません。

FAT32形式ディスクをWindows95で使用する場合、必ずOSR2以降のバージョンで使用し、OSR2より前のバージョンでは絶対使用しないでください。使用するとディスク内のデータが破損します。

ユーティリティ

本製品には、運用に便利なユーティリティソフトが付属しています。ここでは、これらのユーティリティソフトの使用方法について説明します。

1 Windows用

1.1 DVDデバイスタイプチェンジャ

DVD デバイスタイプチェンジャは、Windows 上で DVD-RAMドライブの装置種別(デバイスタイプ)^{*1}を擬似的に変更するためのSCSIツールです。DVD-RAMドライブを光ディスクドライブ(MOドライブ相当)に擬似変更することで、DVD-RAMドライブにおいてFAT16/32形式ディスクの作成や利用が可能になります(補足説明参照)。ここでは、DVD-RAMドライブが組み込まれている環境で使用する場合と、組み込まれていない環境^{*2}で使用する場合に分けて操作手順を説明します。



*1 SCSIの規格で決められている装置の種類を表す番号。

*2 PC-9800シリーズなど、DVD-RAMドライブが用意されていない環境でDVD-RAMドライブを使用する場合。

① 本機能は、弊社動作確認済みDVD-RAMドライブでのみ使用できます。動作確認済みDVD-RAMドライブの最新情報は、弊社ホームページで確認するか、弊社にお問い合わせください。

[補足説明]

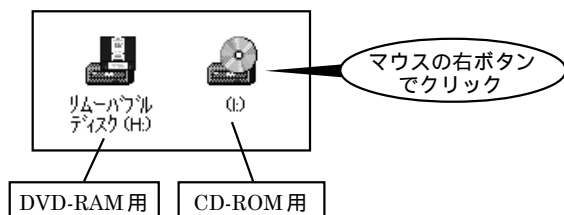
一般に、DVD-RAMドライブのデバイスタイプは05番です。CD-ROMドライブ(05番)と同じ番号のため、DVD-RAMドライブが無ければWindows上では単なるCD-ROMドライブとしてしか認識されません。本ソフトは、DVD-RAMドライブのデバイスタイプを擬似的に変更し、光ディスクドライブと同じ07番にします。これにより、Windows標準環境でDVD-RAMドライブが光ディスクドライブとして使用できます。

1.1.1 DVD-RAMドライブが組み込まれている場合

DOS/V機など、既にDVD-RAMドライブ付属のDVD-RAMドライブが組み込まれている場合の操作方法。

DVD-RAMドライブのデバイスタイプを光ディスクドライブに変更

- (1) **マイコンピュータ** をダブルクリックし、DVD-RAMドライブのCD-ROM用アイコンにカーソルを合わせ、マウスの右ボタンをクリックします。



- (2) メニューから[DVD デバイスタイプの変更]を選択します*¹。これにより、デバイスタイプが変更されます*²。

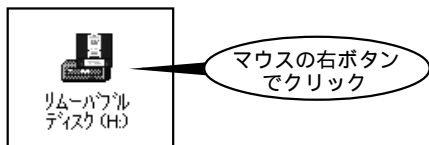
*¹ ガイダンスが表示される場合は、これに従って進んでください。DVDドライブが組み込まれている場合、ドライブの無効確認ガイダンスが表示されます。

*² 変更中にシステムが不安定(ハングアップなど)になる場合は、「1.1.3 環境設定」をご覧ください。デバイスタイプ変更時にWindowsを再起動するようにしてください。

① デバイスタイプ変更後、DVD-RAMドライブは光ディスクドライブとしてのみ使用可能。CD-ROMドライブの機能は利用できません (CD-ROM用アイコンは表示されません)。

DVD-RAMドライブのデバイスタイプを元に戻す

- (1) **マイコンピュータ** をダブルクリックし、DVD-RAMドライブのアイコンにカーソルを合わせ、マウスの右ボタンをクリックします。



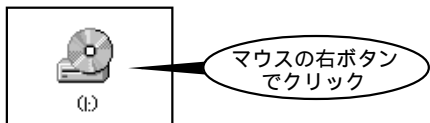
- (2) メニューから[DVD デバイスタイプの変更]を選択します。これにより、デバイスタイプが元に戻ります。

1.1.2 DVD-RAMドライブが組み込まれていない場合

DVD-RAMドライブがパソコンに組み込まれていない場合の操作方法。

DVD-RAMドライブのデバイスタイプを光ディスクドライブに変更

- (1) マイコンピュータ をダブルクリックし、DVD-RAMドライブのCD-ROM用アイコンにカーソルを合わせ、マウスの右ボタンをクリックします。



- (2) メニューから[DVDデバイスタイプの変更]を選択します^{*1}。これにより、デバイスタイプが変更されます^{*2}。

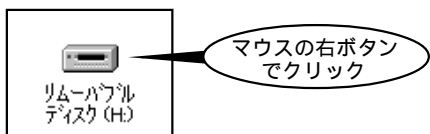
^{*1} ガイダンスが表示される場合は、これに従って進んでください。

^{*2} 変更途中でシステムが不安定(ハングアップなど)になる場合は、「1.1.3 環境設定」をご覧ください。この場合、デバイスタイプ変更時にWindowsを再起動するようにしてください。

ⓘ デバイスタイプ変更後、DVD-RAMドライブは光ディスクドライブとしてのみ使用可能。CD-ROMドライブの機能は利用できません。

DVD-RAMドライブのデバイスタイプを元に戻す

- (1) マイコンピュータ をダブルクリックし、DVD-RAMドライブのアイコンにカーソルを合わせ、マウスの右ボタンをクリックします。



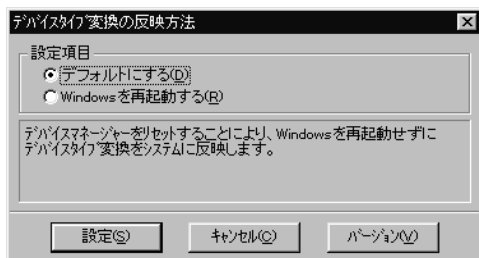
- (2) メニューから[DVDデバイスタイプの変更]を選択します。これにより、デバイスタイプが元に戻ります。

1.1.3 環境設定

DVDデバイスタイプチェンジャーは、デバイスタイプ変更時にデバイスマネージャーをリセットすることで、デバイスタイプ変更情報をシステムに反映させています。Windowsを再起動しないため、デバイスタイプの変更が高速に行えます。但しお使いのパソコン環境によっては、まれにデバイスマネージャーリセット時にシステムが不安定(ハングアップなど)になる場合があります。このような場合は次の手順でリセット条件を変更し、デバイスタイプ変換の際は必ずWindowsを再起動するようにしてください。なお、DVD-RAM用ドライバが組み込まれているパソコン環境では、本設定に関係なく必ずWindowsが再起動されます。

(1) [スタート] - [プログラム] - [SCSI 郎バックアップEZ] - 「デバイスタイプ変換の反映方法」の順に選択します。

・次のウィンドウが表示されます。



(2) 設定項目内の「Windowsを再起動する」を選択し、[設定]ボタンを押します。

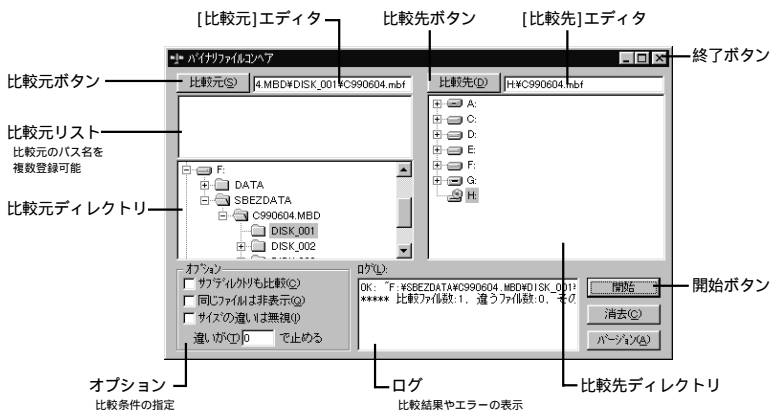
以後、デバイスタイプ変更時はWindowsが再起動します。

1.2 バイナリファイルコンペア

バイナリファイルコンペアは、ファイルどうしの内容を比較するプログラムです。ファイル単位はもとより、ドライブ単位やフォルダ単位での比較も簡単に行なえます。ハードディスクに作成した分割バックアップファイルをCD-R/RWなどに保存した場合、正しく保存できたかを確認するために使用します。ここでは、基本的な操作手順について説明します。詳しい説明はオンラインヘルプをご覧ください。

(1) [スタート] - [プログラム] - [SCSI 郎バックアップ EZ] - 「バイナリファイルコンペア」の順に選択します。

・次のウィンドウが表示されます。



(2) [比較元] ボタンを押し、比較元となるファイルを指定して[OK] ボタンを押します。

ドライブやフォルダ単位で比較を行なう場合は、「比較元ディレクトリ」で、ドライブまたはフォルダを指定してください。

(3) [比較先] ボタンを押し、比較先のファイルを指定して[OK] ボタンを押します。

ドライブやフォルダ単位で比較を行なう場合は、「比較先ディレクトリ」で、ドライブまたはフォルダを指定してください。

(4)画面のオプションで比較条件を設定します。

[サブディレクトリも比較]

比較元にドライブやフォルダを指定した場合、本項目をチェックすると、比較元に含まれるサブディレクトリ以下に存在する全てのファイルに対しても比較を行いません。

[同じファイルは非表示]

本項目をチェックすると、ファイルの内容が同じ場合は結果をログに表示しません。

[サイズの違いは無視]

本項目をチェックすると、比較する2つのファイルサイズに違いがあった場合でも、小さい方を最大サイズとして比較を行いません。

(5) [開始] ボタンを押します。比較結果やエラーメッセージが画面内のログに表示されます。

(6) プログラムを終了する場合は、画面右上の[×] ボタンを押してください。

2 MS-DOS用

ここでは、MS-DOS用のユーティリティソフトの使用方法について説明します。
これらソフトは、「起動ディスク」からOSを起動した場合に使用します。

書式内の各記号の意味は、本書はじめの記号説明をご覧ください。

2.1 UDFディスクのディレクトリ表示(UDFDIR)

UDF形式ディスク^{*1}の内容を表示します^{*2}。

^{*1} この形式はDVD-RAMディスクにあります。

^{*2} UDF形式のディスクに対し、DOSのDIRコマンドは使用できません。

[書式]

UDFDIR [オプション] <ドライブ>[ディレクトリ]

[オプション]

-r サブディレクトリも表示

<ドライブ> UDFディスクのドライブ名を指定します。

[操作例]

(1) Kドライブの内容を表示。

UDFDIR K: [Enter]

(2) Kドライブの¥TESTの内容を表示(サブディレクトリも表示)

UDFDIR -r K:¥TEST [Enter]

[注意事項]

本ソフトは、UDF形式のディスクにカレントドライブを移した状態では実行できません^{*1}

^{*1} DOS標準環境ではUDF形式のディスクが認識できないため。

(例) UDF形式のディスクがKドライブの場合

C:¥>UDFDIR K: [Enter]

カレントドライブはK以外にする

2.2 UDFディスクからのファイルコピー(UDFCOPY)

UDF形式のディスク*1にあるファイルを、FAT形式のディスクにコピーします*2。

*1 この形式はDVD-RAMディスクにあります。

*2 UDF形式のディスクに対し、DOSのCOPYコマンドは使用できません。

[書式]

UDFCOPY <UDFパス> <DOSパス>

<UDFパス> UDFディスク内のファイルを次の形式で指定します。
<ドライブ><ディレクトリ><ファイル名>

<DOSパス> DOSディスク内のファイルを次の形式で指定します。
[ドライブ]ディレクトリ\ファイル名>

[操作例]

Kドライブ(UDF)のルートディレクトリにあるTEST.TXTファイルを、
Cドライブ(FAT)のルートディレクトリに同じ名前でコピーする。

```
UDFCOPY K:¥TEST.TXT C:¥TEST.TXT [ Enter ]
```

[注意事項]

(1)本ソフトは、UDF形式のディスクにカレントドライブを移した状態では
実行できません*1。

*1 DOS標準環境ではUDF形式のディスクが認識できないため。

(例)UDF形式のディスクがKドライブの場合

```
C:¥>UDFCOPY K:¥TEST.TXT C:¥TEST.TXT [ Enter ]
```

カレントドライブはK以外にする

(2)FAT形式からUDF形式ディスクへのファイルコピーは出来ません。

注意事項

1 フォルダの属性について

バックアップデータをリストアした場合、フォルダの属性(日付、時間)^{*1}が変わります(ファイルの属性は変わりません)。

^{*1} リストアを行った日の情報になります。

2 使用するハードディスクについて

バックアップデータをリストアするハードディスクは、次の点にご注意ください。

既存のハードディスク

データ破損事故を起こしたハードディスクは、原因をよく調べてから使用して下さい。データ破損事故の原因には、操作ミスによるデータ消去、部品の故障、衝撃による内部破損、高温による熱暴走など色々あります。データ破損事故の原因がわからないまま同じハードディスクを使用すると、バックアップデータをリストアしてもトラブルが再発する確率が高くなります。

新しいハードディスク

ハードディスクを交換/増設する場合は、次の点にご注意ください。

[IDEハードディスク]

接続する場所により、マスターまたはスレーブいずれかの設定が必要です。また、パソコン本体にハードディスクのパラメータを登録^{*1}することが必要です。詳しくは、ハードディスクまたはパソコン付属の取扱説明書でご確認ください。

^{*1} パソコンの BIOS 設定で行います(自動の場合もあります)。

[SCSIハードディスク]

SCSI ID番号の設定や、ターミネータ(終端抵抗)の設定^{*2}が必要です。特にSCSI ID番号は、他のSCSI装置と重複しないように設定してください。詳しくは、ハードディスク付属の取扱説明書でご確認ください。

^{*2} SCSIバスラインの最後に位置する装置にターミネータの設定が必要。

3 リストア時のドライブ名指定について

「SCSI郎バックアップDOSリスタラー」によるリストア作業では、「起動ディスク」からOSを起動します。このため、パソコンの環境によりハードディスクからOSを起動した場合と、各装置(FD、ハードディスク、MO、PDなど全て)のドライブ名が変わることがあります。必ず「装置 - ドライブ名対応表」^{*1}を見ながら、リストアを行ってください。特にPC-9800シリーズの場合、ドライブ名が大幅に変わります。ご注意ください。

*1本書「セットアップ作業」の「3.3 動作確認」参照。

4 起動ドライブをバックアップする方へ

起動ドライブ(OSが入っているドライブ)を一括してバックアップ/リストアする場合は、以降の注意事項をよくお読みください。

4.1 バックアップ

バックアップでは、必ずハードディスクの全区画(ドライブ)をバックアップしてください。起動ドライブだけバックアップしても、パソコン起動時に問題が生じたり、アプリケーションソフトが使用できない場合があります。理由は次の通りです。

❶ アプリケーションプログラムは、起動ドライブ以外にインストールされている場合があります。アプリケーションプログラムがインストールされているドライブがバックアップされていないと、パソコンが起動できてもアプリケーションプログラムは使えません。また、パソコン起動時に自動実行されるプログラムの場合、エラーが発生します。

4.2 リストア

同じパソコンにリストアしてください。

バックアップデータをリストアする場合は、必ずバックアップを行ったパソコンに対して行ってください。異なるパソコンにバックアップデータをリストアしても、システムは正しく動作しません^{*1}。

*1 パソコンごとにハードウェア環境(マザーボードのチップセットやビデオカード、各種増設ボードなど)がみな異なるため。

同じ区画に一括してリストアしてください。

バックアップデータをリストアする場合は、バックアップ時と同じ区画に戻してください。同じ区画に戻さないとシステムが正しく復元できません。

また、リストアする場合は全ての区画を一緒に戻してください。

[バックアップ]

ハードディスク	リムーバブルメディア
区画 1	バックアップファイル1
区画 2	バックアップファイル2
区画 3	バックアップファイル3

[リストア]

リムーバブルメディア	ハードディスク
バックアップファイル1	区画 1
バックアップファイル2	区画 2
バックアップファイル3	区画 3

5 ディスク圧縮機能をご利用の方へ

Windowsには、ディスクの容量をソフト的に拡大する「ドライブスペース」が付属しています。「ドライブスペース」で圧縮したドライブ(以後圧縮ドライブと呼ぶ)には、物理的なドライブの容量以上のデータが保存できます。このため、圧縮ドライブをそのままバックアップすると、リストア時に全てのデータが戻せなくなる場合があります。圧縮ドライブをバックアップする場合は、圧縮ボリュームファイル^{*1}が存在するドライブ(ホストドライブ^{*2})をバックアップ/リストアしてください。また安全対策上、圧縮ドライブ^{*3}もバックアップしてください。リストア後、圧縮ボリュームファイルのマウント^{*2}が正しくできない場合でも、被害を最小限に押さえることができます。

*1 圧縮ドライブの内容が保存されている単一のファイル(隠しファイル)で、DRVSPACE.xxxなどの名称が付けられています。なお、このファイルは圧縮されていないドライブ(ホストドライブと呼ばれる)に保存されています。

*2 圧縮ドライブやホストドライブ、マウントなどの用語の意味や圧縮のメカニズム等については、ドライブスペースのオンラインマニュアルをご覧ください。

*3 圧縮ドライブは、物理ドライブの容量以上にデータが入ることを除けば通常のドライブと同じです。リストアに必要な容量を持つハードディスクを用意すれば、バックアップデータを復元することができます。

① ドライブスペース以外のディスクの圧縮機能をご利用の方は、上記を参考にその圧縮機能をよく理解してからバックアップを行ってください。

① パソコン環境により、「起動ディスク」からOSを起動すると各装置ドライブ名が変わることがあります。必ず「装置 - ドライブ名対応表」^{*4}を見ながら作業を行ってください。

^{*4} 本書「セットアップ作業」の「3.3 動作確認」参照。

次に圧縮ドライブのバックアップ/リストア作業の概要を説明します。

(1) ホストドライブの確認

[スタート]-[プログラム]-[アクセサリ]-[システムツール]にある[ドライブスペース]を実行^{*5}します。バックアップしたいドライブ(例えばx)が「圧縮ドライブ」となっていれば、そのドライブは圧縮機能が設定されています。「圧縮ドライブ」をバックアップする場合は、「ドライブxのホストドライブ」^{*6}と表示されたドライブ名を探してください。

^{*5} メニューに登録されていない場合は、ドライブスペースはパソコンにインストールされていません(圧縮ドライブもありません)。

^{*6} 圧縮機能を使用する場合、圧縮ドライブに対応するホストドライブが必ずあります。

(2) 圧縮ドライブのバックアップ/リストア

ホストドライブをバックアップ/リストアします。但し、FDISKコマンドでハードディスクの区画を作成/変更した場合*7は、次からの注意事項をよくお読みください。

*7新しいハードディスクを購入した場合など。

[区画作成 / 変更時の注意事項]

ハードディスクの区画の作成 / 変更を行うと、ディスク内の圧縮機能が解除されます。このため、「起動ディスク」でOSを起動しても、あとから追加されたドライブ(ホストドライブまたは圧縮ドライブ)が表示されません。ここでは次のケースに分けて注意点を説明します。

- ・既存のドライブを丸ごと圧縮した場合
- ・既存ドライブの空き領域の一部で圧縮ドライブを作成した場合

既存のドライブを丸ごと圧縮した場合

圧縮ドライブには、圧縮を行ったドライブ名が付けられます。また、ホストドライブには新たなドライブ名が割り付けられます。

(例1) DOS/V機でC:(区画1)を一括して圧縮した場合

次の環境では、G:をバックアップし、C:に戻します。

ハードディスクから OS 起動	起動ディスクから OS 起動
FD [A:] 圧縮ドライブ [C:] HDD 区画 2 [D:] : HDD 区画 1 [G:](C:のホストドライブ)	FD [A:] HDD 区画 1 [C:] HDD 区画 2 [D:]

(例2) PC-9800シリーズでA:(区画1)を一括して圧縮した場合

次の環境では、G:をバックアップし、B:に戻します。

ハードディスクから OS 起動	起動ディスクから OS 起動
圧縮ドライブ [A:] HDD 区画 2 [B:] FD [C:] : HDD 区画 1 [G:](A:のホストドライブ)	FD [A:] HDD 区画 1 [B:] HDD 区画 2 [C:]

既存ドライブの空き領域の一部で圧縮ドライブを作成した場合
圧縮ドライブには、新たなドライブ名が割り付けられます。また、空き領域を提供したドライブがそのままホストドライブになります。

① ホストドライブには2つ以上のドライブ(未圧縮の既存ドライブ、圧縮ドライブ)の情報が格納されます。このため、リストアにより2つ以上のドライブ内容が一括して書き換えられます。十分ご注意ください。

(例1) DOS/V機でC:(区画1)の一部で圧縮ドライブを作成した場合
次の環境では、C:をバックアップ*8し、C:に戻します。

*8 既存のCドライブの内容とGドライブの内容がバックアップされます。

ハードディスクから OS 起動	起動ディスクから OS 起動
FD [A:] HDD 区画1 [C:](Gのホストドライブ) HDD 区画2 [D:] : 圧縮ドライブ [G:]	FD [A:] HDD 区画1 [C:] HDD 区画2 [D:]

(例2) PC-98シリーズでA:(区画1)の一部で圧縮ドライブを作成した場合
次の環境では、A:をバックアップ*9し、B:に戻します。

*9 既存のAドライブの内容とGドライブの内容がバックアップされます。

ハードディスクから OS 起動	起動ディスクから OS 起動
HDD 区画1 [A:](Gのホストドライブ) HDD 区画2 [B:] FD [C:] : 圧縮ドライブ [G:]	FD [A:] HDD 区画1 [B:] HDD 区画2 [C:]

(3) マウント

リストア後、圧縮ボリュームファイルのマウント作業を行います*10。正しくこの作業を行わないと、圧縮ドライブが使用できません。詳しくはドライブスペースのオンラインマニュアルをご覧ください。

*10 マウントが自動設定になっている場合は、特に作業は不要です。

6 SCSI I/F別注意事項

6.1 DOS/V機, PC98-NXシリーズ用SCSI I/F

SCSI BIOSを持つSCSI I/Fで、SCSI BIOSにMOドライブなどのリムーバブル装置を固定ディスクとして扱うかどうかのオプション設定機能^{*1}がある場合は、必ず設定を無効 (Disable)^{*2}にしてください。

*1 「Removable media as BIOS device」や「Support Removable Disk Under BIOS as Fixed Disks」など。オプション名称は各社異なります。

*2 通常SCSI I/Fの工場出荷時の初期値は (Disable) です。

6.2 PC-9800シリーズ用SCSI I/F

NEC準拠のSCSI BIOSを搭載したSCSI I/F^{*1}の場合、MS-DOS環境ではSCSI BIOSが光ディスク装置の接続を受け持ちます^{*2}。但し、SCSI BIOSで接続された環境では、FAT32形式のディスクは読み書きできません。メディアは、FAT16でフォーマットしたものを使用してください。なお、どうしてもFAT32形式メディアからリストアを行いたい場合は、CONFIG.SYSファイル内のディスクドライバにオプションを付加してください。但しこの場合、下記の利用上の注意事項をよくお読みのうえご利用ください。

*1 PC-9801-92/100, PC-9821X-B02/B02L/B09など。

*2 ディスクドライバは不要。弊社ディスクドライバは自動的に組み込まれません。

[オプション追加]

「起動ディスク」のCONFIG.SYSファイルをエディタで開き、ディスクドライバ (MSDRVR.SYS) 登録行の最後に "-oi-" を追加^{*3}してください。

*3 ディスクドライバが強制的に組み込まれます。オプションを追加する場合は、他のオプションとの間に半角スペースを1つ入れて区切ってください。

```
DEVICE = [パス名]MSDRVR.SYS ..... -ob -oi-
```

[利用上の注意事項]

オプションを付加すると、1台の光ディスク装置に2つのドライブ名が割り付けられます。リストア時の光ディスクドライブ指定では、後のドライブ名 (ディスクドライバが接続した方) を指定してください。

① 2つのドライブ名を混在して使用しないでください。利用環境によりディスク内のデータが破損することがあります。

7 SCSI 郎card(MIC16K)ご利用の方へ

本製品には、SCSI 郎card用ASPIマネージャ(PEA1406A.SYS)が付属しています。このASPIマネージャは、動作の際パソコンのPCカードコントローラ^{*1}を直接制御するため(ポイントインープラと呼ばれる)「PCカードマネージャ(カードサービス / ソケットサービス)」^{*2}を必要としません。但し直接PCカードコントローラを制御するため、次のような利用制限があります。ご注意ください。

*1 PCカードを制御するためのIC。パソコンの内部に組み込まれています。

*2 PCカード制御用ドライバ。Plug&Playを利用するための基本的なドライバ。

(a)利用可能なパソコン機種

Intel製PCカードコントローラ^{*3}を搭載パソコンでの利用に限定されます。現在多くのノートパソコンはこの条件を満たします。但し一部条件外のパソコンも存在します。この場合、本製品付属のASPIマネージャは使用できません。条件外のパソコンで使用する場合は、SCSI 郎card付属のASPIマネージャ(PCカードマネージャ上で動作するもの)を使用してください。利用の詳細は、「補足資料」内「3 利用可能SCSI I/F」をご覧ください。

*3 インテル製i82365SLまたは互換品。

(b)Plug & Play未対応

SCSI I/Fを装着した状態でパソコンを起動してください。パソコン起動後は、PCカードの抜き差しはできません。

(c)PCカードスロットについて

ASPIマネージャは、決められたPCカードスロット(初期状態ではスロット0番)としか通信できません。PCカードスロットを複数持つパソコンの場合、PCカードスロットの0番がどれかをよく確認してください。なお、ASPIマネージャにオプションを付加することで、0番以外のPCカードスロットで使用することも可能です。変更する場合は、次のように「起動ディスク」のCONFIG.SYSファイルをエディタで修正してください。

[オプション書式]

DEVICE = [パス名]¥PEA1406A.SYS -sn

("n"にPCカードソケット番号を指定。初期値は0)

(例)PCカードスロット1番で使用

DEVICE = [パス名]¥PEA1406A.SYS -s1

8 CD-R/RWドライブをご利用の方へ

SCSI 郎バックアップEZでは、バックアップファイルを直接 CD-R/RW メディアに作成することはできませんが、CD-R/RWメディアに書き込むためのバックアップファイルをハードディスクに作成することができます*1。ハードディスクに作成したバックアップファイルをCD-R/RWメディアに書き込むことで*2、CD-R/RWメディアからリストアを行なうことができます。なお、CD-R/RWメディアからリストアを行なう場合、起動ディスクにCD-ROMドライブの組み込みが必要です。以下にデスクトップパソコンのCD-ROMドライブを例に、起動ディスクにCD-ROMドライブを組み込む方法を紹介いたします。

*1 詳細は、「機能 / 操作説明」の「1 バックアップ」をご覧ください。

*2 メディアへの書き込みは、CD-R/RW ドライブ付属の書き込みプログラム等で行ないます。

① ノートパソコンをご利用の方へ

ノートパソコンの場合、デスクトップパソコンと異なり使用するCD-ROMドライブごとにCD-ROMドライブの組み込み方法が異なります(ドライブが複数のファイルで構成されるなど)。起動ディスク(FD)にDOS用CD-ROMドライブを組み込む方法については、各CD-ROMドライブ購入元にお尋ねください。

① SCSI CD-ROMドライブを使用する方へ

SCSI用CD-ROMドライブの多くはASPI対応のドライブです。ASPI対応のドライブを使用する場合は、起動ディスクにあらかじめASPIマネージャを登録しておいてください。

(1) DOS用CD-ROMドライブを用意し、起動ディスクのルート(¥)ディレクトリにファイルをコピーします。DOS用CD-ROMドライブの入手方法については、CD-ROMドライブ購入元にお尋ねください。

(2) Windows付属のMSCDEX.EXE*3を、起動ディスクのルート(¥)ディレクトリにファイルをコピーします。MSCDEX.EXEは通常Windowsインストールディレクトリ(通常 ¥ WINDOWS)下の ¥ COMMANDフォルダ内にあります。

*3 DOSでCD-ROMを使用するための拡張プログラム。

(3) Windowsの「メモ帳」等のエディタを使用し、起動ディスクのCONFIG.SYSファイルの最後の行に次の2行を追加します。なお、CONFIG.SYS内にはあらかじめ記述例が記載されてますので、これを編集してください。

9 バックアップファイルの互換性について

SCSI 郎バックアップ EZ は、Ver2.0 から Ver2.5 へのバージョンアップの際にバックアップファイルの内部データ構造が変更されました。旧バージョンで作成されたバックアップファイル^{*1}は、本バージョンの「起動ディスク」ではリストアできません。既存のバックアップファイルをリストアする場合は、既存のバージョンの「起動ディスク」で行なってください^{*2}。

*1 「SCSI 郎バックアップキット Ver1.x ~ Ver2.0」や「SCSI 郎バックアップ EZ Ver2.0」で作成したバックアップファイル。

*2 Windows が正しく動作している環境であれば、データ保存用ドライブに限り Windows 上から実行する「SCSI 郎バックアップ DOS リストアラー」でリストアができます。

10 SCSI郎バックアップEZデモ版ご利用の方へ

「SCSI郎バックアップEZ デモ版 (Internet等で配布)で作成したバックアップファイルをリストアする場合は、次の点にご注意願います。

デモ版 Ver2.5 以降ご利用の方

本製品 (Ver2.5 以降) の「起動ディスク」を使うことで、通常の手順でリストア作業が行なえます。

デモ版 Ver2.0 ご利用の方

OS 起動ドライブのバックアップファイルはリストアできません^{*1}。ご了承下さい。なお、データ保存用ドライブのバックアップファイルは、Windows 上から実行する「SCSI 郎バックアップ DOS リストアラー」にてリストア作業が行なえます。

*1 Ver2.5 以降の「起動ディスク」では Ver2.0 のバックアップファイルのリストアができないため。詳細は「9 バックアップファイルの互換性」をご覧ください。

トラブルシューティング

「起動ディスク」でOSを起動すると、リムーバブルディスク装置(MO, PD, リムーバブル・ハードディスクなど)が正しく認識できない。

次の点を確認してください。

- ・リムーバブルディスク装置の電源は入っていますか？
- ・リムーバブルディスク装置は正しく接続されていますか？
- ・リムーバブルディスク装置のドライブ名が変わっていませんか？
- ・リムーバブルディスク装置を使用するための環境が整っていますか？

[DOS/V機, PC98-NXシリーズ]

リムーバブルディスク装置を使用するためには、CONFIG.SYSにASPIマネージャとディスクドライバが組み込まれていることが必要です。特に、ASPIマネージャは使用するSCSIアダプタに合ったものが必要です。起動ディスクの作成で、正しくSCSIアダプタの型番を選択してください。

[PC-9800シリーズ]

- ・SCSI BIOS-ROMの無いSCSIアダプタ(MPS3211J/3210Jなど)

リムーバブルディスク装置を使用するためには、CONFIG.SYSにASPIマネージャとディスクドライバが組み込まれていることが必要です。特に、ASPIマネージャは使用するSCSIアダプタに合ったものが必要です。起動ディスクの作成で、正しくSCSIアダプタの型番を選択してください。

- ・SCSI BIOS-ROM搭載 SCSIアダプタ(MPS32A/3240J/390uNなど)

リムーバブルディスク装置はOSの標準機能により、「512byte/セクタ」メディアはそのまま使用できます^{*1}。但し、光ディスク装置は必ずSCSI BIOS-ROMの管理下に置いて^{*2}ください。

^{*1}「2K, 1Kbyte/セクタ」メディアを利用する時のみドライバが必要。

^{*2} SCSI ID 番号を 0 から連続するように設定します。

OSをリストアしたらOS起動時にエラーが出たりロックする。

OSをリストアしたらパソコンの動作が何かおかしい。(不安定になった)

次の点を確認してください。

- ・全てのドライブのロングファイル名を復元しましたか？
- ・同一パソコンのバックアップデータをリストアしましたか？

- ・同じ区画のバックアップデータをリストアしましたか？
- ・全区画(ドライブ)のリストアを行いましたか？
- ・リストア後にハードディスクの空き容量は十分ありますか？

また、ハードディスクの区画作成(FDISK)を行ってからバックアップデータを戻してみてください。なお、問題が解決しない場合は原因を特定するため、通常の方法でWindowsをインストール^{*1}し、Windowsが正しく動作するかを確認してください。

*1 パソコンまたはWindows 付属の取扱説明書にそって行ってください。

[Windows が正しく動作する場合]

トラブルの原因は、バックアップが正しくできていないことが考えられます。

[Windows が正しく動作しない(または不安定な)場合]

トラブルの原因は、ハードディスク装置の取り付け/設定が正しくできていないためと考えられます。次の点を確認してください。

・IDE ハードディスク

マスター/スレーブの設定や、パソコンのBIOSの設定(ハードディスクのパラメータ設定)は正しくできていますか？

・SCSI ハードディスク

SCSI ID 番号の設定や、ターミネータ(終端抵抗)の設定は正しくできていますか？

上記項目に問題が無い場合、ハードディスク自体に問題がないかを確認してください。故障したり、過去の読み書き時に問題を起こしたハードディスクは、ドライブのエラーチェック^{*2}などでハードディスク自体を検査してください。

*2 ドライブアイコンを右ボタンでクリックし、[プロパティ] [ツール]で[エラーチェックの履歴]で[チェックする]ボタンを押すことでエラーチェックが可能。

リストアしたら、一部アイコン(受信トレイなど)がおかしくなった。

リストア後にリネーム作業(ショートファイル名 ロングファイル名への変換)を行いましたか？行わないとこのような症状が発生します。本書「機能/操作説明」の「2 リストア」をよくご覧ください。

起動ディスクを使ってDOS環境でリストア中、次のエラーが表示された。

ドライブ xx のディスク一杯です。
ファイル(xxxxxxx)の展開が失敗しました。
リカバーファイル(xxxxxxxx.MBF)に名前を変更します。
総リストアサイズ: xxxxxxKB
バックアップファイルの展開が終了しました。
何かキーを押して下さい。

空き領域がほとんど無いドライブをバックアップし、これを同じハードディスクにリストアすると、このエラーが表示される場合があります。「SCSI 郎バックアップDOS リストアラ」では、リストア中に変換表ファイル(ロングファイル名を一時的にショートファイル名にした際の変換表)をハードディスクに作成しますが、ハードディスクに空き容量が極端に少ないと、この変換表ファイルがハードディスクの空きを使ってしまうため、リストアが完了できず上記エラーが表示されます。エラーが表示された場合は、次の方法で対処してください。

[作業手順]

次の手順でリストアを行ない、変換表ファイルをリストア先ドライブ以外のハードディスクに作成してください。

- (1) 起動ディスクで起動し、「SCSI 郎バックアップDOS リストアラ」が起動したら[Esc]キーを押してDOS画面に戻ります。
- (2) リストアプログラム(srbkupdr.exe)を次の書式で実行してください。

```
SRBKUPDR -[ドライブ] -[ファイル名1] -E0 "[ファイル名2]"
```

ドライブ: リストア先ドライブ

ファイル名1: 変換表ファイル名

(拡張子MBFでルートディレクトリに作成。名称は自由)

ファイル名2: バックアップファイル名(拡張子MBF)

- (例) バックアップファイルE:¥990608.MBFをCドライブにリストアし、変換表ファイルをDドライブ(HD)にCDRIVE.MBFで作成する場合。

```
SRBKUPDR -DC:¥ -LD:¥CDRIVE.MBF -E0 "E:¥990608.MBF" [Enter]
```

- (3) 起動ドライブからOSを起動し、通常のリストア手順でロングファイル名の変換作業を行なってください。

付録

1 FDISKによる区画の作成

ハードディスクの区画の作成 / 削除 / 変更は、ハードディスクセットアッププログラム(FDISK.EXE)^{*1}で行います。ここでは、FDISK.EXEで区画を作成する場合の基本的な操作手順について説明します。なお、FDISK.EXEの詳しい操作方法についてはOSの取扱説明書などをご確認ください。

^{*1}「起動ディスク」にWindows付属のFDISK.EXEがコピーされています。

[注意事項]

必ず全ての区画をバックアップしてから行ってください。区画の作成 / 変更 / 削除を行うと、ハードディスク内の全ての区画が初期化され、データが消去されます。

区画を作成する場合は、既存のハードディスクの区画数および種別(基本領域 / 拡張領域)を同じにしてください。また、起動ドライブ(OSが入るドライブ)は必ず「基本領域」にしてください。

種類の違うパソコンで使用していたハードディスク^{*2}を接続すると、区画の削除や再作成が正しくできないことがあります。このような場合は、既存の環境で初期化や区画の全削除などを行ってから使用してください^{*3}。

^{*2} NEC PC-9800シリーズで使用していたものをDOS/V機で使用する場合やその逆など。

^{*3} SCSIアダプタの取扱説明書もご覧ください。解決策が紹介されている場合があります。

[区画の作成手順]

(1) フロッピーディスク装置に「起動ディスク」を挿入します。

(2) [周辺機器] [パソコン]の順に電源を入れます。

DOS/V機, PC98-NXシリーズ

画面の指示に従い、キーボードタイプを指定してください。

・「SCSI 郎バックアップ DOS リストアラー」が自動的に起動します。

PC-9800シリーズ

・「SCSI 郎バックアップ DOS リストアラー」が自動的に起動します。

(3) [ESC]キーを押します。

- ・DOSのコマンドプロンプト画面が表示されます。
(x は RAM ディスクのドライブ名)

```
X:¥>
```

(4) FDISK コマンドを実行します。

```
X:¥> FDISK [ Enter ]
```

- ・FDISK メイン画面が表示されます。(下の例は Windows95 の場合)

```
Microsoft Windows 95
ハードディスクセットアッププログラム
(C) Copyright Microsoft Corp. 1983 - 1995

FDISK オプション

現在のハードディスク: 1

次のうちからどれか選んでください:

1. MS-DOS 領域または論理 MS-DOS ドライブを作成
2. アクティブな領域を設定
3. 領域または論理 MS-DOS ドライブを削除
4. 領域情報を表示
5. 現在のハードディスクドライブを変更

どれか選んでください: [1]

FDISK を終了するには Esc キーを押してください。
```

① Windows のバージョン*1により、FDISK 起動時に「大容量ディスクのサポートを使用可能にしますか?」というメッセージが表示されることがあります。FAT16*2を使用する方はNd[N]を、FAT32*3を使用する方はここでYes[Y]を入力してください。

*1 Windows98/95(OSR2)では、FAT16に加えFAT32がサポートされています。

*2 最大16bit(約6万5千)のクラスタが管理(1ドライブは最大2GB)できるファイルシステム。2GBを超える場合は区画の分割が必要です。

*3 最大32bit(約42億9496万)のクラスタが管理(1ドライブは最大2TB)できるファイルシステム。FAT16に比べ1ドライブの最大容量が大きく設定でき、ディスクへの記録効率も高い。但し、使用できるハードディスクは512MB以上に限られます。

- (5)メイン画面から「5.ハードディスクドライブの変更」を選択し、ディスク番号を指定します。指定後、FDISKメイン画面上部の「現在のハードディスク:」に指定したハードディスク番号が表示されていることを確認します。
- (6)メイン画面から「4.領域情報を表示」を選択し、ハードディスク内に既に区画が存在するかを確認してください。区画がある場合は、次の区画情報をメモしておきます。終了したら、[Esc]キーを押してメイン画面に戻ります。

区画分割数および各区画の容量

各区画の種別(基本領域/拡張領域)

- (7)項番(7)で区画が存在する場合は、メイン画面から「3.領域または論理 MS-DOS ドライブを削除」を選択し、各区画を削除します。なお、削除が終了したら[Esc]キーを押してメイン画面に戻ります。
- (8)新しく区画を作成します。「1.MS-DOS 領域または論理 MS-DOS ドライブを作成」を選択し、区画を作成してください。なお、区画の分割数や種別(基本領域/拡張領域)はバックアップの時と同じ状態にしてください。また、起動ドライブ(OSが入るドライブ)は必ず基本領域に設定してください。
- (9)区画の作成作業が終了したら、[Esc]キーを押してメイン画面に戻ります。
- (10) [Esc]キーを押してFDISKプログラムを終了し、指示に従いパソコンを再起動します。

2 装置 - ドライブ名対応表

本書「セットアップ」の「3.3 動作確認」を参考に、お使いのパソコンの「装置 - ドライブ名対応表」を作成してください。

No	装置名	ドライブ名	
		ハードディスク から OS 起動	起動ディスク から OS 起動
1			
2			
3			
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11			
12			

3 利用可能SCSI I/F

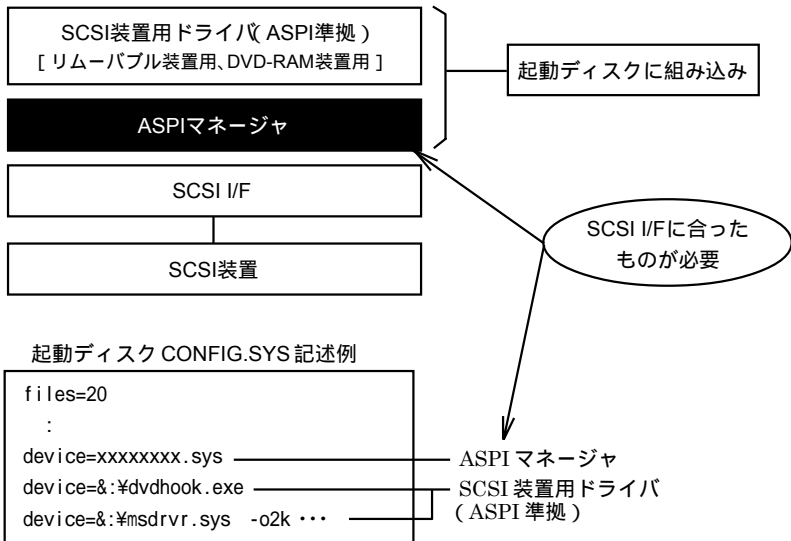
本製品で使用できるSCSI I/Fは、Windows95/98対応SCSI I/FでASPIマネージャ^{*1}が用意できるものです。ASPIマネージャは、MS-DOS環境^{*2}でSCSI装置を利用するために必要なSCSIドライバで、使用するSCSI I/Fに合ったものが必要です。ASPIマネージャは、米国 Adaptec 社が提唱した SCSI 用標準インターフェースです。これを組み込むことで、ASPI 準拠の SCSI 装置用ドライバ^{*3}が使用できます。本製品には、一部のSCSI I/F用(主にマイクロスタッフ製)のASPIマネージャが同梱されていますが、これ以外のSCSI I/F(未対応SCSI I/F)を使用する場合は、別途ASPIマネージャを用意してください。各SCSI I/F利用時の注意事項を次に示します。

*1 ASPI:Advanced SCSI Programming Interfaceの略。

*2 リストア作業は、MS-DOS環境で行います。

*3 本製品には、「ディスクドライバ」と「DVD-RAMドライバ」が付属しています。

① ASPIマネージャの仕様や入手方法等については、各SCSI I/Fメーカーにお問い合わせください。参考資料として代表的な周辺機器メーカーのホームページアドレスを本章「6 各社ホームページアドレス」示します。



3.1 ディスクトップ用SCSI I/F

PC-9800シリーズ用SCSI I/Fでは本製品付属の汎用ASPIマネージャ^{*1}が使用できます。但し、DOS/V機やPC98-NXシリーズ用SCSI I/Fを使用する場合は、必ずSCSI I/F製造元が提供するASPIマネージャを用意してください。ASPIマネージャは通常SCSI I/Fに付属していますが、商品によっては別売りの場合もあります。ご注意ください。なお、参考資料として一部SCSI I/FメーカーのASPIマネージャ(DOS/V機用)を以下に示します^{*2}。

*1 NEC純正SCSI I/Fなど、NEC準拠のSCSI BIOS ROMが搭載されたSCSI I/Fを単独で使用する場合のみ使用可能。2枚目以降のSCSI I/Fとして使用する場合やSCSI BIOS ROMを持たないSCSI I/Fの場合は、製造元が提供するASPIマネージャが別途必要となります。

*2 内容は、変更されることがあります。参考としてご覧ください。

[ASPIマネージャ] (型式、タイプ、ASPIマネージャファイル名)

アダプテックジャパン(株)

AHA-2940/U/AU/UW	PCI SCSI I/F	ASPI8DOS.SYS
------------------	--------------	--------------

(株)メルコ

IFC-USP	PCI SCSI I/F	MASPI.SYS
IFC-UP	PCI SCSI I/F	ADVASPI.SYS
IFC-DP	PCI SCSI I/F	MASPIDP.SYS

ラトックシステム(株)

REX-PCI30	PCI SCSI I/F	ASP3050.SYS
REX-PCI32	PCI SCSI I/F	ASP950.SYS

Tekram Technology

DC-390	PCI SCSI I/F	ASPI.SYS
DC-390W/F/U	PCI SCSI I/F	ASPIUWF.SYS

SYMBIOS

SYMシリーズ()	PCI SCSI I/F	ASPI8XX.SYS
SYM53c8xx SCSIコントローラ搭載品		

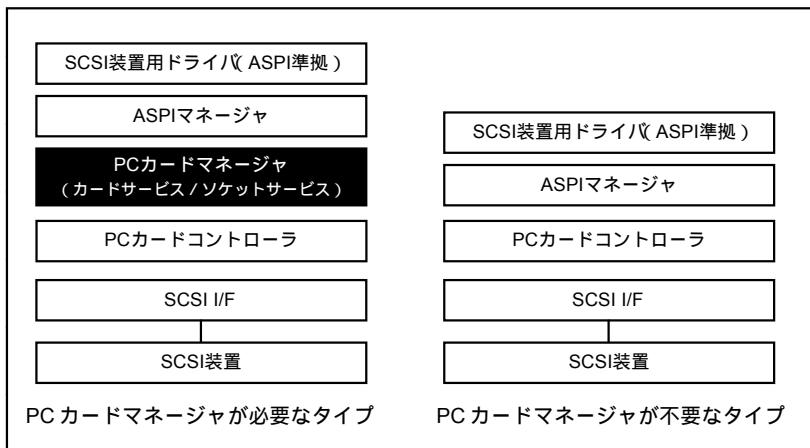
initio

INI-9090U	PCI SCSI I/F	ASPI910U.SYS
-----------	--------------	--------------

3.2 ノートパソコン用SCSI I/F

ノートパソコン用のPCMCIA SCSI I/Fも、デスクトップ用SCSI I/Fと同様ASPIマネージャが必要です。但しPCMCIA SCSI I/F用ASPIマネージャの場合、動作環境として「PCカードマネージャ(カードサービス/ソケットサービス)」^{*1}を必要とするものと、必要としないもの(ポイントインープラと呼ばれる)の2種類があります。ここではそれぞれの注意事項等について説明します。事前にお使いのSCSI I/Fがどちらのタイプか取扱説明書等で確認してからご覧ください。なお、SCSI I/Fによっては両タイプのASPIマネージャが付属している場合があります。この場合は、「起動ディスク」への組み込みが簡単なポイントインープラタイプをご利用ください。

^{*1} PCカード制御用ドライバ。Plug&Playを利用するための基本的なドライバでパソコンに合ったものが必要。PlayAtWill, CardSoft, PCM Plusなどがある。



PCカードマネージャが必要なタイプ

このタイプのSCSI I/Fを使用するためには、「起動ディスク」に「PCカードマネージャ」と「ASPIマネージャ」の組み込みが必要です。「PCカードマネージャ」を組み込むためには次の作業が必要です。但し項番(b)の作業内容がかなり厳しいため、「起動ディスク」の作成にはMS-DOSやPCカードマネージャに関する高度な知識が必要です。PCカードマネージャの組み込み方法等は、PCカードマネージャ提供元にご相談ください。

(a) PCカードマネージャの準備

お使いのパソコンに合ったPCカードマネージャを用意します。ノートパソコンに同梱されていない場合は、別途入手が必要です。

(b) PCカードマネージャの組み込み

「起動ディスク」にPCカードマネージャを組み込みます。PCカードマネージャ付属のインストーラの多くは、ハードディスクへのインストールを前提に作られてるため、「起動ディスク」へのPCカードマネージャ組み込み作業は、通常ユーザが手作業で行います(関連ファイルのコピーやCONFIG.SYSファイルの編集など)。取扱説明書などをよくお読みのうえ行ってください。なお、PCカードマネージャの組み込みは多くのディスク容量を必要とします。まずASPIマネージャのみ入れた「起動ディスク」を作成し、空き容量を確認してからインストール計画*1を立ててください。

*1 PCカードマネージャが最低限のドライバで動くようにしてください。

[CONFIG.SYSファイル例]

この例はPCカードマネージャがIBM製PlayAtWillの場合です。ドライバやオプションなどの設定はパソコン環境により異なります。参考としてご覧ください。

```
files=20
buffers=20
:
device=EMM386.EXE ... ----- EMM386設定
device=&:¥jdisp.sys /hs=lc
device=&:¥jkeyb.sys &:¥jkeybrd.sys
device=IBMDSS01.SYS
device=IBMDOSCS.SYS
device=DICRMU01.SYS /MA=C800-CFFF
device=$ICPMDOS.SYS
device=AUTODRV.SYS AUTODRV.INI
device=xxxxxxx.sys ----- ASPI マネージャ
device=&:¥dvdhook.exe ----- (SCSI I/F ごと異なります)
device=&:¥msdrvrv.sys -o2k ... ----- SCSI 装置用ドライバ
                                     (ASPI 準拠)
```

PC カードマネージャを必要としないタイプ

このタイプのSCSI I/Fは、ASPIマネージャが直接パソコンのPCカードコントローラ^{*1}を制御します。このため、「起動ディスク」には「ASPIマネージャ」を組み込むだけで済みます。便利な反面、PCカードマネージャを使わないため次のような注意点もあります。SCSI I/Fの取扱説明書をよく確認のうえ、「起動ディスク」を作成してください。

*1 PCカードと通信するためのIC。ノートパソコンの中に組み込まれています。

(a) 利用可能なパソコン機種

一般にこのタイプのASPIマネージャは、Intel製PCカードコントローラを搭載したパソコンでの利用に限定されます。最近はこの条件を満たすパソコンが殆どですが、条件外のパソコンも一部存在します。SCSI I/F付属の取扱説明書で利用できるパソコンの機種をよく確認してください。

(b) Plug & Play未対応

パソコン起動後のPCカードの抜き差しはできません。

(c) ASPIマネージャについて

SCSI I/Fにより、PCカードコントローラと通信するドライバがASPIマネージャと独立している場合があります。SCSI I/F付属の取扱説明書で、ASPIマネージャ以外に組み込むドライバがないかよく確認してください。他のドライバを組み込む必要がある場合、「起動ディスク」への組み込みはユーザが手作業(ドライバのコピーやCONFIG.SYSファイルの編集など)で行う必要があります。

(d) PCカードスロットについて

パソコンにPCカードスロットが複数ある場合でも、利用できるPCカードスロットが限定される場合があります。

4 起動ディスクについて

ブートディスクメーカーで作成した「起動ディスク」は、記録効率を高めるため、各種ドライバやユーティリティソフトが圧縮された形で保存されています。「起動ディスク」からOSを起動した場合、起動途中でRAMディスクドライブ*1が作成され、ここに圧縮されたファイルが展開されます。以下に「起動ディスク」のCONFIG.SYSファイルの概要を次に示します*2。

*1 メモリ上に作られた仮想ドライブ。ドライブは物理ドライブの最後に割り付けられます。

*2 内容は実際と異なる場合があります。参考としてご覧ください。

DOS/V 機 ,PC98-NX シリーズ

```
files=20
buffers=20
dos=high
shell=command.com /p /e:256
device=himem.sys /testmem:off
device=ramdinit.sys
device=ramdrive.sys /e 2048
device=ramdconfig.sys -l -c&
device=idcmpsys.exe -d &:¥ bootdisk.pak
device=&:¥biling.sys
device=&:¥jfont.sys /p=&:¥
device=&:¥jdisp.sys /hs=lc
device=&:¥jkeyb.sys &:¥jkeybrd.sys
device=xxxxxxx.xxx
device=&:¥dvdhook.exe
device=&:¥msdrvrv.sys -o2k ...
```

RAM ドライブの作成及び
圧縮ファイルの展開

SCSI や ATAPI ドライバ
(使用するインターフェース
ごとに異なります)

DVD-RAM 装置用ドライバ

リムーバブル装置用ドライバ
(MO,PD 装置など)

RAM ドライブ指定

PC-9800 シリーズ

```
files=20
buffers=20
dos=high
shell=command.com /p /e:256
device=himem.sys /testmem:off
device=ramdinit.sys
device=ramdrive.sys /e 2048
device=ramdconfig.sys -l -c&
device=idcmpsys.exe -d &:¥ bootdisk.pak
device=&:¥i1bhook.exe
device=xxxxxxx.xxx
device=&:¥dvdhook.exe
device=&:¥msdrvrv.sys -o2k -l+ -ob
```

5 DOSリストアラーのアイコン設定

「SCSI郎バックアップEZ」メニュー内の「SCSI郎バックアップDOSリストアラー」を使用する場合は、動作環境を次のように設定^{*1}してください。

*1 お使いの環境により、各項目がすでに設定されている場合もあります。

(1) Windows の「スタート」ボタンをマウスの右ボタンでクリックし、ショートカットメニューから「開く」を選択します。

(2) 「プログラム」 - 「SCSI郎バックアップEZ」の順にダブルクリックします。



(3) 「SCSI郎バックアップDOSリストアラー」アイコンをマウスの右ボタンでクリックし、ショートカットメニューから「プロパティ」を選択します。

(4) プロパティ画面で以下の設定を行なってください。

「プログラム」タグをクリックし、「プログラム終了時にウィンドウを閉じる」のチェックボックスをチェックします。

「メモリ」タグをクリックし、全ての項目の値を[自動]^{*2}に設定します。
*2 数値ボックス右の[]ボタンをし、一覧から[自動]を選択します。

「その他」タグをクリックし、「スクリーンセーバーを使う」のチェックボックスのチェックを外します。

(5) 設定が終われば[OK]ボタンを押し、プロパティ画面を終了します。

(6) 以上で設定は終了です。

6 各社ホームページアドレス

参考資料として、リムーバブルディスク装置(MO,PDなど)やSCSI I/Fを販売する周辺機器メーカーのホームページアドレスを紹介します。

メーカー名	URL
(株)マイクロ・スタッフ	http://www.microstaff.co.jp/
松下電器産業(株)	http://www.panasonic.co.jp/
NEC	http://www.nec.co.jp/
ソニー(株)	http://www.sony.co.jp/
(株)日立製作所	http://www.hitachi.co.jp/
オリンパス光学工業(株)	http://www.olympus.co.jp/
三菱化学メディア(株)	http://www.mcmedia.co.jp/
(株)メルコ	http://www.melcoinc.co.jp/
(株)アイ・オー・データ機器	http://www.iodata.co.jp/
ロジテック(株)	http://www.logitec.co.jp/
(株)キャラベルデータシステム	http://www.caravelle.co.jp/
緑電子(株)	http://www.midorielec.co.jp/
日本パーソナルコンピュータ(株)	http://www.jpcltd.co.jp/
(株)センチュリー	http://www.century.co.jp/
(株)富士通パーソナルズ	http://www.fjp.co.jp/
アダプテックジャパン(株)	http://www.adaptec.co.jp/
ラトックシステム(株)	http://www.rexpccard.co.jp/
QLogic	http://qlogic.qlc.com/
Tekram Technology	http://www.tekram.com/
SYMBIOS	http://www.symbios.com/
Advanced System	http://www.advansys.com/
initio	http://www.initio.com/
Iomega	http://www.iomega.com/
SYQUEST	http://www.syquest.com/

SCSI郎バックアップEZ

取扱説明書

1999年6月 第4版 第1刷発行

株式会社マイクロ・スタッフ

〒168-0064 東京都杉並区永福 1-39-16 水本ビル

TEL: 03-3325-4670

FAX: 03-3327-7037

URL:<http://www.microstaff.co.jp/>

ご注意 使用する前に必ずお読みください

ソフトを使用する前に、必ず以下の「ソフトウェア使用約款」をお読みください。お客様がソフトの利用を開始された場合には、本約款に御同意いただいたものとみなします。

ソフトウェア使用約款

お客様（以下「使用者」といいます）と株式会社マイクロ・スタッフ（以下「当社」といいます）は、当社が使用者に提供する契約ソフトウェアの使用に関して、以下の事項を確認します。

1.用語の定義

契約ソフトウェア

契約ソフトウェアとは、マスターディスクを記憶媒体とする機械読取可能な形式でのプログラムをいいます。

使用

使用とは、使用者が契約ソフトウェアを記憶媒体から読み出すことをいいます。

指定機械

指定機械とは、使用者が契約ソフトウェアを使用するために設置した1台のコンピュータシステムをいいます。

複製

複製とは、同一形式もしくは別形式の記憶媒体に契約ソフトウェアを複製再生すること、契約ソフトウェアを同一もしくは別のプログラミング言語で書きかえること、及びプログラミングのコンパイル、アSEMBルなどを行うことをいいます。

改造

改造とは、契約ソフトウェアの修正、追加等を行い、または契約ソフトウェアの全部もしくは一部を利用して別のソフトウェアを作成することをいいます。

2.使用者の許諾

当社は、使用者がこの約款に従ってソフトウェアを使用することを条件に使用者に契約ソフトウェアの非独占的使用権を許諾します。使用者は契約ソフトウェアを指定機械上のみで使用することができます。

3.契約ソフトウェアの複製

指定機械上での使用を目的とする契約ソフトウェアの保存、バックアップ以外の目的のために、契約ソフトウェアの複製を行うことはできません。

4.契約ソフトウェアの改造

使用者は、自己の使用のために必要な場合に限り契約ソフトウェアを改造することができます。この場合、当該改造物における契約ソフトウェアと同一または類似と認められる部分についての著作権は、当社に帰属します。当社は、当該改造物に関して発生する問題および損害に対して一切責任を負わないものとします。

5.財産権、著作権

契約ソフトウェアおよびそれを複製したものの著作権その他の財産権は、理由の如何に係らず当社もしくは契約ソフトウェアに記述された個人または法人に帰属します。使用者は、契約ソフトウェアおよびそれを複製したものと並びに契約ソフトウェアを改造したもから Copyright等の注釈を取り除くことはできません。

6.使用権の再許諾、譲渡の禁止

使用者は、第三者に契約ソフトウェアおよびそれを複製または改造したものの占有を移転、または使用権を譲渡もしくは再許諾することはできません。

7.契約期間

この契約は、使用者が契約ソフトウェアの使用を開始した日に発効し、使用者が契約ソフトウェアの使用を止めるときまで有効とします。ただし、使用者がこの約款のいずれかの条項に違反した場合、当社は使用者に許諾した契約ソフトウェアの使用権を剥奪し、契約を終了させることがあります。

8.契約終了後の義務

使用者は、契約が終了したとき使用者の責任において第三者が使用できない状態に破棄の上廃却するものとし、契約ソフトウェアを複製・改造したものの、および契約ソフトウェアに関する一切の資料を破棄するものとします。

9.当社の責任

当社は、契約ソフトウェアに致命的欠陥（バグ）を発見したときは、使用者に限りその回避方法などの連絡をします。当社は、使用者が契約ソフトウェアを使用することによって発生した直接的、間接的もしくは波及効果による損害、データ・プログラムその他無体財産に対する損害、使用利益および得べかりし利益の喪失等に対して一切の責任を負わないものとします。

当社が上記以外の損失について責任を負ういかなる場合においても、当社の責任は使用者が契約ソフトウェアの使用料金として支払った金額を超えないものとします。

10.合意管轄

本証に関する紛争は、東京地方裁判所を管轄裁判所として解決するものとします。